

Title	携帯電話呼び出しによる対話割り込みに対するポライ トネス方略
Author(s)	小島, 英治
Citation	
Issue Date	2002-03
Type	Thesis or Dissertation
Text version	author
URL	http://hdl.handle.net/10119/342
Rights	
Description	Supervisor: 下嶋 篤, 知識科学研究科, 修士

修 士 論 文

携帯電話呼び出しによる 対話割り込みに対するポライトネス方略

指導教官 下嶋 篤 助教授

北陸先端科学技術大学院大学
知識科学研究科知識システム基礎学専攻

050031 小島 英治

審査委員 下嶋 篤 助教授（主査）
杉山 公造 教授
石崎 雅人 助教授
藤波 努 助教授

2002 年 2 月

目次

<u>1章 はじめに</u>	1
<u>1.1 背景</u>	1
<u>1.2 問題意識</u>	1
<u>1.3 本研究の目的と意義</u>	2
<u>1.4 次章以降の構成</u>	2
<u>2章 先行研究とポライトネス理論</u>	3
<u>2.1 携帯電話の先行研究</u>	3
<u>2.2 Politeness 理論</u>	4
<u>2.3 Face の概念</u>	4
<u>2.4 フェイス侵害度の見積もりの公式</u>	5
<u>2.5 ポライトネス・ストラテジー</u>	6
<u>2.5.1 何も緩和策を講じずに FTA する</u>	6
<u>2.5.2 緩和策を講じて FTA する（ポジティブ・ポライトネス）</u>	7
<u>2.5.3 緩和策を講じて FTA する（ネガティブ・ポライトネス）</u>	7
<u>2.5.4 OFF RECORD（ほのめかす）</u>	7
<u>2.5.5 FTA そのものを行わない</u>	7
<u>2.5.6 ストラテジーの選択を決定する</u>	8
<u>2.6 ディスコース・ポライトネス</u>	9
<u>3章 予備実験</u>	11
<u>3.1 予備実験の目的</u>	11
<u>3.2 予備実験の方法</u>	11
<u>3.2.1 被験者</u>	11
<u>3.2.2 統制条件</u>	12
<u>3.2.3 予備実験の対話収録環境と機材</u>	13
<u>3.2.4 収録の日時・場所</u>	14

3. 2. 5	収録の手続き	14
3. 2. 6	割り込み回数と時間	16
3. 3	予備実験の結果と考察	17
3. 3. 1	割り込み電話による対話への影響	17
3. 3. 2	割り込み電話前後の対等性復帰方略	18
3. 3. 3	方略と対話への影響	19
3. 3. 4	その他の結果	20
3. 4	予備実験での反省点	22
4章	本実験1	24
4. 1	本実験の目的	24
4. 2	本実験の方法	25
4. 2. 1	被験者	25
4. 2. 2	統制条件	25
4. 2. 3	収録日時・場所	25
4. 2. 4	対話収録環境と機材	26
4. 2. 5	収録手続き	27
4. 2. 6	割り込み回数と時間	29
4. 3	結果と考察	30
4. 3. 1	結果	30
4. 3. 2	考察	30
4. 3. 2	反省	31
5章	本実験2	33
5. 1	本実験の目的	33
5. 2	本実験の方法	33
5. 2. 1	被験者	33
5. 2. 2	統制条件	34
5. 2. 3	収録日時・場所	34
5. 2. 4	収録手続き	34

5. 2. 5	割り込み回数と時間	35
5. 3	分析方法	35
5. 3. 1	分析対象者の選定	35
5. 3. 2	文字化について	36
6 章	結果	38
6. 1	方略の分類について	38
6. 1. 1	受け手の方略	39
6. 1. 2	待ち手の方略	46
6. 1. 3	携帯電話イベント外の方略	52
6. 2	各方略の頻度	53
6. 2. 1	受け手の方略頻度	54
6. 2. 2	待ち手の方略頻度	54
7 章	考察	56
7. 1	各方略におけるポライトネス効果	56
7. 1. 1	受け手の方略におけるポライトネス効果	56
7. 1. 2	待ち手の方略におけるポライトネス効果	59
7. 1. 3	携帯電話イベント外の方略におけるポライトネス効果	61
7. 2	フェイス配慮・非配慮の分類	63
7. 2. 1	携帯電話イベントの方略におけるフェイス分類	64
7. 2. 2	携帯電話イベント外の方略も含んだフェイス分類	66
7. 2. 3	各割り込みにおけるポライト・ノンポライト発話の比較	67
7. 3	観察結果から	69
8 章	終わりに	72
	参考文献	75

図目次

図 1 ポライトネス・ストラテジーの選択を決定する状況	9
図 2 対話収録環境	13
図 3 対話収録環境	26
図 4 受け手へのメール支持	27
図 5 被験者へのメール指示（本実験2）	34
図 6 受け手、待ち手それぞれの方略関係図	69

表目次

表 1 予備実験における各方略の分布	18
表 2 方略とその影響	20
表 3 携帯イベントに関わる受け手の方略の種類	39
表 4 携帯イベントに関わる待ち手の方略の種類	46
表 5 受け手の方略頻度（回数別）	54
表 6 待ち手の方略頻度（回数別）	55
表 7 携帯電話イベントの方略におけるフェイス分類	64
表 8 携帯電話イベント外の方略も含んだフェイス分類	66
表 9 各割り込みにおけるポライト・ノンポライト発話の比較	68

1 章 はじめに

1. 1 背景

近年、誰もが携帯電話を持ち、使うようになった。ひと昔前まではビジネスマンが仕事で使うだけのものだったが、今日では老若男女を問わず多くの人が会話やメールを楽しんでいる。しかし、いつでもどこでも使うことができる便利さゆえに、携帯電話を使う上でモラルのあり方が問われている。

最近ようやく携帯電話の使用をひかえるよう、電車内や劇場など公共の場でアナウンスが流れ、モラルの一つとして定着してきたが、それでもかかって来たものは仕方ないとばかりにマナーを無視している人は多い。

このような一般的な使い方に関するモラルやマナーも重要である。しかし携帯電話が家庭の中に入り込んできて、思わぬ事態を招いていることに注目したい。

家族で食事中に団欒中に、突然携帯電話が鳴る。『家族(する)家』を書いた作家の藤原智美氏は携帯電話が家庭に入ってきたことで、親は孤立化し傷つき、子供は親に無関心になる。氏はやがてそんな「ケイタイ的な家族関係」が当たり前になっていくだろうと、警鐘を鳴らしている。

1. 2 問題意識

このように今の日本社会では、家庭の中でも各個人が外とのコミュニケーションを重視し始めている。個人と個人がコミュニケーションを大事にすることは、決して悪いことではない。しかし、人間がコミュニケーション能力を最初に養う場であるはずの家庭で、家族全員が外との個人的な繋がりを重視してしまったら、これから先10年20年後の人間や家族はどうなってしまうのだろうか。21世紀に入った今、「家族である」意味が問われる時代になってきたのかもしれない。

このような問題を解決するには、どうすればよいだろうか。将来、携帯電話ある

いはそれに類するコミュニケーションツールは、使われ続けるであろう。それならば、携帯電話が会話途中で割り込んだ時の状況を見つめ、どのような方法を取ればコミュニケーションがスムーズに進行するのかを解明したい。

1. 3 本研究の目的と意義

携帯電話に関する研究は近年、研究対象として注目されてきているが、主に携帯電話の普及率や使用頻度、使用状況とそれに伴う若者(20代前後の学生)の対人関係に関する意識変化など社会学のフィールドワーク調査研究が多い。

それに対し本研究では実際の対話を扱い、実験による認知科学的な手法を用いて対話における携帯電話の割り込み状況や、対話への影響を明らかにするものである。さらに、ポライトネス理論の「フェイス」という概念を適用して、携帯電話の受け手と待ち手がお互いの相手に対して言語的にどのような配慮をしているかも考察する。

本研究によって上手な携帯電話割り込みの対処方法がわかれば、我々は割り込みによる疎外感を感じることなく、より良い人間関係を築くことができるはずである。

また携帯電話による対話割り込みという研究が、ポライトネス研究の新しい応用範囲を示し、新しい研究分野の開拓に役立つ可能性がある。

1. 4 次章以降の構成

2章では携帯電話に関する先行研究と、語用論研究から Brown&Levinson (1987)のポライトネス理論を取り上げた。この理論は「円滑な人間関係を確立・維持するための言語的ストラテジー」として言語学だけではなく、社会心理学、文化人類学など、様々な分野に影響を与えた(宇佐美まゆみ、2001)とされ、本研究を進めるにあたって大きな指針となった理論である。また7章ではこの理論を元に本実験の考察を進めていく。3章では予備実験で得た結果をまとめ、4章は本実験1を、5章は本実験2について、6章は本実験2の結果を示した。

2 章 先行研究とポライトネス理論

この章では、はじめに携帯電話の先行研究を示した後、ポライトネス理論とフェイスの概念について記す。

2. 1 携帯電話の先行研究

携帯電話の研究は、近年増加している。明治書院が発行している月刊誌「日本語学（2000 年 10 月号）」では、特集として「ケータイ・コミュニケーション」をくみ、至文堂が出す月刊誌「現代のエスプリ（2001 年 4 月号）」のテーマも、「携帯電話と社会生活」である。

その中の研究テーマとして、大きく三つに分類することができる。一つは「携帯電話の普及」について扱ったもので、例えば「マルチメディアとしての携帯電話」（岡田、2001）など、携帯電話が自動車電話から一般社会にどのように普及してきたかを主としている。二つめは「若者の携帯電話の利用状況」について扱ったもので、『『ケータイ』という研究テーマ』（田中、2000）や「若者の携帯電話行動」（吉井、2001）など携帯電話の利用目的や頻度について、大学生を対象としたアンケート調査である。三つ目は「メディアと人間関係」また「対人関係の変化」を扱ったもので、「若者の友人関係と携帯電話利用－関係希薄化理論から選択的關係論へ」（松田、2001）などがある。

その他、「ケータイと言語行動・非言語行動」（三宅、2000）では、ある若者の携帯電話とメールの送受信の通話記録を文字化し、その中で若者は「(笑い)」などの特徴的な非言語情報を多く使っていること、また話題が短く、頻繁に送受信される言語行動はチャットのコミュニケーションに近いことを指摘している。また三宅は、この論文に出てくる若者 Q の場合「たえず複数の人たちとつながっているのも特徴で、一人とのメールの送受信の間にほかの人との連絡を取るという傾向がある」と特徴付けている。

2. 2 Politeness 理論

私たちは日ごろから会話相手との関係によって、また相手の反応によって話し方を変えている。ポライトネス理論は日本でも広く受け入れられており、その研究も多い。しかし、日本では「敬語研究」も盛んなことから、「ポライトネス」の定義が「敬意」「丁寧さ」など曖昧になっているのもまた事実である。そこで本論文では「談話のポライトネスーポライトネスの談話理論構想ー」（宇佐美、2001）に倣い、Brown & Levinson（1987）が提唱する「ポライトネス」の定義を「円滑な人間関係の確立・維持するための言語的ストラテジー」とする。

また（宇佐美、2001）によれば、この理論が様々な分野の研究者の注目を浴びてきた主な理由として彼らの理論が「言語的ポライトネス（linguistic politeness）」と銘打ちながらも、言語形式だけにとらわれず、人間関係、社会的・心理的距離、ある行為が相手にかかる負荷度など、複雑に絡み合う社会的諸要因を考慮に入れ、それらの相互作用の効果としての言語行動における「ポライトネス」を、より包括的に取り扱っているからであるとしている。

2. 3 Face の概念

Brown & Levinson のポライトネス理論において「フェイス」の概念は重要である。ある人の社会的価値が他の人にも受け入れられた時、それをその人のフェイスという。人は自分のフェイスを保とうと努力するだけでなく、自尊心と思いやりの両方の働きによって、相手のフェイスも保とうと努めるというのがフェイス理論の大きな捉え方である。自分や他人のフェイスを保つ行動の様式をポライトネスといい、いくつかの基本的なストラテジーがある（東、1997）。

例えば、フェイスを保つ一つの方法として接触を避けるというのは、自分のフェイスを脅かすような行動、話題を避けるということである。

人間には、基本的な欲求として「ポジティブ・フェイス（Positive face）」と「ネガ

ティブ・フェイス (Negative face)」という二種類のフェイスがあるとしている。ポジティブ・フェイスとは「他人に好かれたい、認められたい、尊敬されたい、評価されたい」というフェイスであり、ネガティブ・フェイスは「他人から邪魔されたくない、抑えつけられたくない、自由に行動を選択したい」というフェイスである。

Brown&Levinson は、この基本的欲求としての二つのフェイスを脅かさないように配慮することがポライトネスであると捉え、それぞれ「ポジティブ・フェイス」に訴えかけるストラテジーを「ポジティブ・ポライトネス」、「ネガティブ・フェイス」に配慮するストラテジーを「ネガティブ・ポライトネス」と呼んでいる。対人関係において、自分のフェイスを守るために相手のフェイスを脅かしたり、相手が自分のフェイスを脅かす場合がある。このようなフェイスを脅かす行動や、言語行為を F T A (Face Threatening Acts) と呼んでいる。

例えば、ポジティブ・フェイスを脅かす行為として「馬鹿にする、軽蔑する、非難・批判する」などがあり、ネガティブ・フェイスを脅かす行為には「指示・命令する、アドバイスが心的負担になる」などがある。

2. 4 フェイス侵害度の見積もりの公式

Brown&Levinson はポライトネスとは「ある発話行為 (x) が、相手のフェイスを脅かす度合い」、すなわち「行為 (x) が、相手にかかる負荷度 (R)」の見積もりに応じて規定されるとしている。具体的に数量化できるわけではないが、この相手のフェイス侵害度は三つの要因によって規定されるとして、以下のように公式化している。(Brown&Levinson、1987、p76 より引用)

$$W_x = D(S, H) + P(H, S) + R_x$$

W_x はフェイス侵害度 (F T 度)、「行為 (x) が相手のフェイスを脅かす度合い」を表し、D は「話し手 S (Speaker)」と「聞き手 H (Hearer)」の「社会的距離 (Social Distance)」を意味している。また、P は「聞き手 H」の「話し手 S」に対する「力 (Power)」を表し、 R_x は特定の文化である行為 (x) が「相手にかかる負荷度」

の全体的順位に基づく重み (absolute ranking of imposition) を意味する。

行為 (x) が相手フェイスを脅かす度合い W_x 、すなわち「FT度」の重みは (x) という行為が、ある特定の文化の中でどのくらい相手に負担をかけるとみなされているかという「行為 (x) が相手にかける負荷度 (R)」と、話し手と聞き手の「社会的距離 (D)」(対称的関係)、聞き手の話し手に対する「相対的力 (P)」(非対称的関係) の三要因が関数的に働いて決まってくるとしている。また、行為 (x) が相手にかける負荷度 (R) の重みづけは、文化によって異なるとしている。

本研究である「携帯電話の割り込み」をフェイス侵害度の公式にのっとり、それぞれの重み付けを算出するならば「社会的距離 (D)」は親しい友人か、顔見知り程度、または初対面かによって決まり、「力関係 (P)」は相手の年齢や、会社の上司などそれぞれの立場によって決まる。「相手にかける負荷度 (R)」は割り込み電話の相手と話す時間や、内容に比例すると考えられる。

2. 5 ポライトネス・ストラテジー

話し手が、聞き手のフェイスを脅かしてしまう可能性のある時や、依頼などで、どうしてもFTAをしなければならない時、相手に与えるフェイス侵害度を最小にするための対策を、ポライトネス・ストラテジーという。今回、携帯電話の割り込みをフェイス侵害行為と捉え、そのポライトネス・ストラテジーを本研究と対比させて考察する。

2. 5. 1 何も緩和策を講じずにFTAする

相手フェイスの侵害度を考慮せず、あからさまにそのまま言う方法。外的要因が個人へ単刀直入に言わせる場合で、何らかの緊急事態や、大きな時間的制約 (国際電話) がある場合に使う。例えば、何かの非常事態で相手に危険が迫っている時、「危ないからよけた方がいいですよ」と言うより、「危ない、よけて!」と言った方が適切で伝わりやすい場合がある。

2. 5. 2 緩和策を講じて FTA する（ポジティブ・ポライトネス）

ポジティブ・フェイスに働きかける言い方をする方法である。対話相手が持つ「他者から認められたい」というポジティブ・フェイスを満たすよう、仲間であることを示したり、相手への興味を表したり、共通の場を主張したりする。これは Leech(1983)の「丁寧さの原則」にある「同意点を探せ」、「不一致を避ける」、「楽観的であれ」、「同情を示せ」と似ている。

2. 5. 3 緩和策を講じて FTA する（ネガティブ・ポライトネス）

ネガティブ・フェイスに働きかける言い方をする方法である。対話相手が持つ「他者から邪魔されたくない」というネガティブ・フェイスを、最大限尊重するよう、何か依頼をする場合は、相手に負担を感じさせないように間接的な表現を使う、断る余地を与えるということである。「被験者、やってくれませんか」よりも、「もし良かったら時間のある時でいいので、実験に協力していただけますか」の方が相手のフェイスを重視した、ポライトな言い方になる。

2. 5. 4 OFF RECORD（ほのめかす）

言いたいことをはっきりと表さない方法である。言外にほのめかす言い方をしたり、比喩を用いたり、曖昧にしたり、最後まで言わなかったりする。例えば、消しゴムを忘れてしまって借りたい時に、直接「消しゴム貸してくれない？」と言うのではなく「今日、消しゴム忘れちゃって」と暗に貸して欲しいことをほのめかす言い方である。

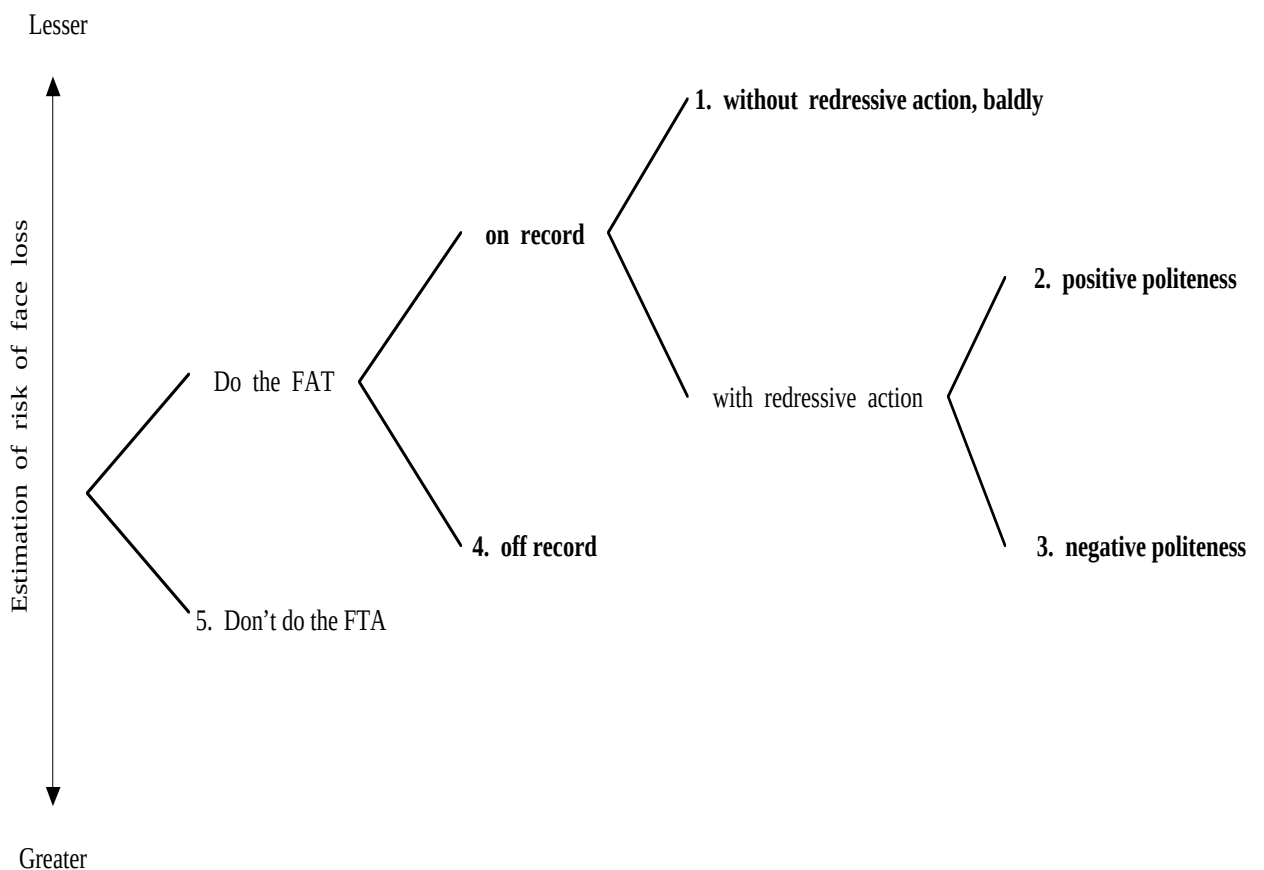
2. 5. 5 FTA そのものを行わない

相手のフェイスを侵害するような行為はせず、何も言わない、ほのめかさないという方法である。

2. 5. 6 ストラテジーの選択を決定する

ポライトネス・ストラテジーの決定は下記の図1のように、F T度が高い (Greater) か、低い (Lesser) かで決められる。

Circumstances determining choice of strategy :



Brown & Levinson 1987, 60

図 1 ポライトネス・ストラテジーの選択を決定する状況

この図1からFT度が高い（強い）ほど、はっきりとしたことは言わない非明示的なストラテジーを選択し、FT度が低い（弱い）とネガティブ・ポライトネスが使われ、さらに低くなるとポジティブ・ポライトネスが選択される。FT度が最も低い（弱い）と話し手が判断した場合は、何も緩和策を講じずに直接的な表現を用いる。

ただし、このストラテジーの選択は Brown&Levinson のポライトネス理論において、話し手と聞き手の間にFT度の見積もりに差がある場合、話し手が良かれと思って選択したストラテジーが、聞き手にとって失礼になることもあるため、問題の一つとなっている。

2. 6 ディスコース・ポライトネス

ディスコース・ポライトネスとは、「一文レベル、一発話行為レベルでは捉えることのできない、より長い談話レベルにおける要素、及び、文レベルの要素も含めた諸要素が、語用論的ポライトネスに果たす機能のダイナミクスの総体（宇佐美、2001）」である。

宇佐美氏は諸言語における文法構造の違いや、敬語を有する言語との比較において、文レベルやいくつかの発話行為レベルだけでは、ポライトネスを公平に比較・検討し、説明することが困難であるとしている。そのためには、発話の連鎖やまとまりだけでなく「談話」全体を対象として、その中でポライトネスを捉えるべきだとするのが、この「ディスコース・ポライトネス」の大まかな趣旨である。

さらに、宇佐美氏はディスコース・ポライトネスを構成する要素は、スピーチレベル（常体・敬体）だけではなく、あいづちの打ち方や頻度、話題導入頻度などの談話行動も含んでいるとしている。また Brown&Levinson はポライトネス理論を相手のフェイスを脅かす行為（FTA）をせざるを得ないときに、「相手のフェイスを脅かす度合いを軽減する」ためにとる「言語行動」としていることから、宇佐美は

フェイス侵害度合いの軽減行為を一種の「有標行動」と捉えている。さらに、ディスコース・ポライトネスにおいてこの「有標行動」をスピーチレベルシフトの観点から分析している。

「有標行動」とは、ディスコース・ポライトネスの中でその使用頻度が全体の 50% を超える「無標」の言語行動（スピーチレベルが敬体、もしくは常体）からの一発話レベルの逸脱のことを指す。

本研究でも分析の一つの手段として、これらの話題導入頻度や「有標・無標行動」の概念を適用するが（スピーチレベルシフトは組み込まない）、基本的には対話中における携帯電話割り込み時の言語行動は、対話全体から見て「有表行動」と捉えることができる。

3 章 予備実験

この章では、本実験に先立って行った予備実験で得られた結果と考察を示す。

3. 1 予備実験の目的

予備実験は、被験者 2 人 1 組で自由対話（話題提供の紙を用意）をしてもらい、その対話途中でこちらから被験者 1 人に電話をかけ、割り込みを起こした。

実験の目的として、①携帯受け手（携帯電話が掛かってきた方）は、どのようにして電話割り込みに対する対話の衡平性復帰（方略）を行うのか、②携帯待ち手（相手が携帯電話で話すのを待っている方）はそれに対していかに反応するのか、③携帯待ち手も対等性復帰を行うか、行うとすればそれはどのような方略か、など携帯電話着信時、着信後における反応などをみるのが目的である。さらに、こうしたことから、④対話中に携帯による割り込みが起こっても、スムーズに対話が進む要因は何か、の四つが予備実験での目的となった。

3. 2 予備実験の方法

以下に、予備実験の具体的な方法を示す。

3. 2. 1 被験者

北陸先端科学技術大学院大学の男子学生（23 歳～26 歳）。

2 人 1 組のペアで 5 組、計 10 名。ペアは親しい間柄とした。

3. 2. 2 統制条件

予備実験では、割り込み電話が対話にどのような影響を与え、一度中断された対話に対し、携帯受け手はどのような対等性復帰方略を試みるかを分析するため、統制条件として Brown&Levinson のポライトネス理論で重要な、「フェイス侵害度の見積もりの公式」を借り、その三要素（社会的距離、力関係、負荷度）を次のようにした。

「社会的距離（D）」と「力関係（P）」は大学院生の同一学科内で、同じ学年の親しい友人という条件で一定にした。「負荷度（R）」は、対話相手が真剣に話しているときほど、割り込み電話が待ち手に及ぼす「フェイス侵害度（W）」は高く（強く）なると考えられ、またそれぞれの被験者間で対話内容をある程度統一するため、こちらから話題を提供した。（話題は以下の3つ）

《対話収録の話題》

1. いま進めている、研究内容について
 - a. 中間審査までに、具体的にやるべきこと
 - b. 自分の研究のどこが大変か
 - c. 相手の研究にアドバイスするとしたら
2. 就職活動について
 - a. 就職活動で、苦労したことは何か
 - b. 面接で、聞かれて困った質問は何か
 - c. 上の質問にどう答えたか
3. 大学院を卒業したら
 - a. 30歳の頃、自分はどうなっているか
(会社を変わっているか、どんなポジションに就いていたいかな等)
 - b. 会社でどんな仕事をしたいか
 - c. 休日は何をして過ごしたいか

※ 1. 2. 3 全ての話題を話して欲しいわけではありません
これらをヒントに色々と話して下さい

しかし、被験者を普段から親しい間柄のペアとしたので、研究内容や就職活動、卒業後の将来についてなど、すでに話している場合も予想できたため、「できるだけこの話題について話していただきたいのですが、話の脱線も可とします」と、口頭で付け加えた。

3. 2. 3 予備実験の対話収録環境と機材

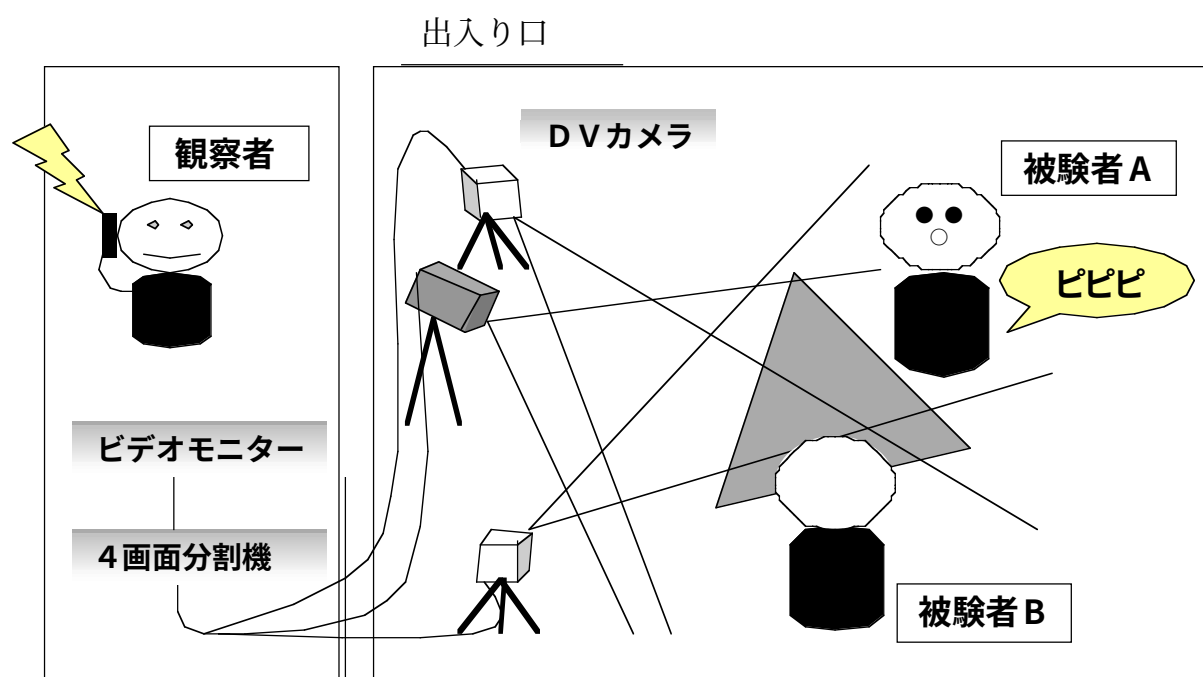


図 2 対話収録環境

三角形（一辺は1m弱）の机を使用し、被験者には机の角を挟んだ両脇の椅子に座ってもらった。それを3台のDVビデオカメラを使って被験者1人ずつと、2人が同時に映るようにセッティングした。音声は2つのビデオカメラから取り、映像と合わせて4画面分割機を通し、ビデオデッキで録画した。収録に使った部屋はそ

れほど広くなくなかったため、カメラと被験者の距離は1 m～1.5 m程度だった。

実験者は被験者への教示の後、隣の部屋へ移りビデオの録画を始めた。収録の間は録画している被験者の会話が漏れないよう、ヘッドホンをしてテレビモニターで観察を続けた。割り込み電話は、実験者の携帯電話（D o c o m o、P 5 0 1 i）を使用し、実験前被験者に記入してもらった承諾書の携帯電話番号を元に、非通知設定でかけた。

3. 2. 4 収録の日時・場所

収録のスケジュール、進行は以下の通りである。

日時 : 7月25日(水)、午後
7月26日(木)、午前、午後

場所 : 北陸先端科学技術大学院大学
知識Ⅱ棟6階ディビジョンルーム

タイムテーブル :

対話収録の説明	2分
収録に関する承諾書記入	3分
対話収録	20分
収録後アンケート	10～15分
合計	35～40分

3. 2. 5 収録の手続き

収録にあたって、被験者に次のような指示を与えた。

<実験前日>

実験中に、こちらから電話を掛ける被験者一人にだけ「携帯電話を持ってきて下さい」とメールで指示した。ただし、携帯をかける被験者の選定基準はない。

＜実験前の教示＞

① はじめに （被験者条件の確認）

「今日是对話収録にご協力いただきまして、ありがとうございます。」

② 対話収録全体の説明

「本日は、あなた方2人に対話をしていただきます。対話の話題はこちらから提供しますので、それをきっかけにして自由に対話して下さい。話が続かない場合は、それ以外の話題でも構いません。対話は対面での対話を20分行ってもらった後、アンケートに答えてもらう時間が15分、合計35分を予定しています。なお、今回の対話収録は個人の思想やプライバシーに焦点を当てるものではなく、人間の認知プロセスに焦点を当てたものですので、なるべくリラックスした状態で行って下さい。何か質問はありますか。」

③ 「対話収録の参加と収録資料公開に関する承諾書」の説明

「対話収録に参加してもらうにあたって、承諾書というものを用意しました。それがこちらです（承諾書を渡す）。内容をよく読んだ上で、納得できればサインして下さい。もし、納得できない場合は、対話収録を拒否して下さって結構です（ボールペンを渡す）。」

④ 対話の課題説明

「それでは、対話収録に入りたいと思います。これからこの部屋で、机の両側に別れて座ってもらい、対話をしてもらいます。これが、2人に話し合ってもらう話題です（対話収録話題の紙を渡す）。1、2、3全ての話題を話して欲しいわけではありません、これらをヒントに色々と話して下さい。また、できるだけこの話題について話していただきたいのですが、話の脱線も可とします。何か質問はありますか。」

＜実験終了後の教示＞

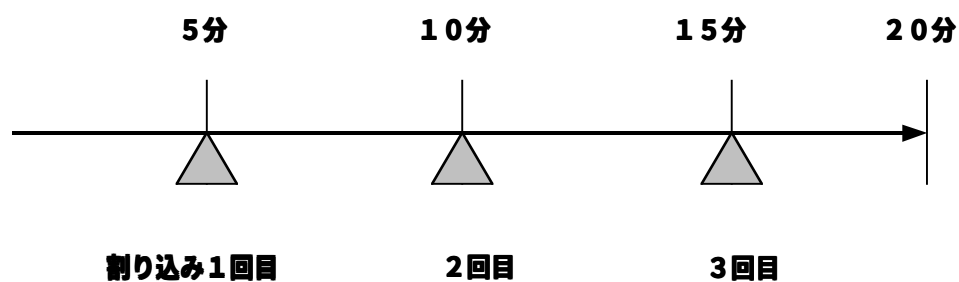
⑤ アンケートの説明

「お疲れ様です。それでは最後に、こちらのアンケートに答えていただきます（アンケート用紙とペンを渡す）。携帯電話の使用頻度と、ある場面での対応、今回行っ

た対話収録の感想です。何か質問があれば、その都度お答えします。アンケートが
終わり次第、今回の実験は終了です。何か質問はありますか。」

3. 2. 6 割り込み回数と時間

携帯電話による割り込み回数と、割り込みの時間は以下の通りである。



対話収録時間 : 20分

割り込み回数 : 3回 (5分、10分、15分の5分間隔)

割り込み時間 : 3～10秒 (相手が出るまで)

割り込み形態 : 非通知設定で被験者にかかけ、相手が出たら切る

割り込み回数は前回行ったアンケート結果から、短時間に何度も電話が掛かって
くることを不愉快に思うという傾向があったため、20分間で3回とした。また割り
込み電話をかけるタイミングも5分間隔と時間で統一した。ただし、電波の都合で
毎回正確にかけることはできなかった(最大で45秒のズレがあった)。

割り込み時間は、被験者が電話に出るまでとした。その結果、被験者によって電
話に出るまでの時間が最短で3秒(机の上に携帯電話が置いてあった場合)、最長で
10秒(ポケットから取り出しにくかった場合)だった。

割り込みの形態は、電話番号がディスプレイに表示され、被験者にかかけ直される
と困るため、非通知設定にした。

被験者が持っている携帯電話の着信音設定は、実験前に実験内容を悟られるのを
防ぐため、こちらから指示することはしなかった。結果、被験者5組中3組が着信

音（着信メロディー）で、2組がバイブレーションであった。

3. 3 予備実験の結果と考察

以下は、予備実験の対話データ（録画したビデオテープ）から、割り込み前10秒間、割り込み後1分40秒間を書き起こした結果、得られた主な結果である。

3. 3. 1 割り込み電話による対話への影響

携帯電話の割り込みが対話へ与えた影響で、特に目立ったものとして①「話題転換」と②「沈黙」の二つがあった。

①の「話題転換」とは、被験者二人が割り込み前10秒間にしていた対話内容と、割り込み後1分40秒の間に内容が変わったもので、15回の割り込み中（被験者5組で、1組20分の対話につき、計3回の割り込み電話をかけた）、5回起こり、それらは全て携帯待ち手によるものだった。

なぜ待ち手はこの「話題転換」を起こしたのか、ポライトネス理論から解釈すると、携帯電話の割り込み前まで話していた内容が中断されたために、「他者から邪魔されたくない」という待ち手のネガティブ・フェイスが侵害されたと考えられる。そして待ち手は「話が中断したのに受け手は謝らない」、「元の話題に戻らない」、「携帯電話に関連した話になった」、「受け手の注意・関心が、携帯電話に移った」など、いずれかのことでより傷つき、「もう次の話題に行きたい」という気持ちになったために「話題転換」が行われた、と解釈することができる。

②の「沈黙」は、「被験者が二人とも話さず、話題提供の紙も見えていない、2秒以上の空白の時間」と定義し、割り込み後1分40秒の間に生じた回数を測定した。沈黙は全ての被験者の組や、各割り込み毎にあるわけではなく、その長さや回数などランダムに発生した。詳しくは3. 3. 2の表1）に示してあるが、15割り込み中7回、延べ数は16回、平均の沈黙時間は、3.68秒だった。またほとんどの沈

黙が、着信後40秒間の間に生起している。さらに、「話題転換」が起こった時には必ず「沈黙」も同時に起こっている。

3. 3. 2 割り込み電話前後の対等性復帰方略

以下の表1.)に示した通り、対話の衡平性復帰方略と解釈できる「言語行動」がいくつかあることがわかった。

しかし、それぞれの方略間の関連性やその効果などは、①被験者数が少なく、②予備実験前に行ったアンケート（携帯電話の利用頻度と、携帯の割り込みに対して、どの程度自分や相手のフェイスに配慮した行動をとっているのかを聞いたもの）に協力してもらった被験者もいたため（事前にどのような実験をするか、というバイアスがかかっていた）、はっきりとわからなかった。また、表中にある待ち手の「うながし」や「いやみ」などの定義も、実験者の主観であり、客観的なものではない。

「質問」というのは、「誰からの電話」など、待ち手の割り込んできた携帯電話に関する質問である。

	会話時間	うながし	いやみ	事前謝罪	事後謝罪	報告1	報告2	報告3	質問	話戻し	話戻し	話題転換	サイレンス
1組目	1回目		○			○			○		○		
	2回目		○			○	○		○			○	3秒 1回
	3回目				○	○			○			○	3秒 1回
2組目 パイプ	1回目										○		3秒 1回
	2回目	35秒						○		○			
	3回目	41秒						○			○		
	4回目					○	○			○			
3組目	1回目					○	○		○			○	※1
	2回目		○						○	○		○	※2
4組目 パイプ	1回目			○		○			○			○	※3
	2回目		○			○	○		○			○	2秒 1回
	3回目	○				○	○						
5組目	1回目	33秒			○					○	○(後)		
	2回目							○		○	○(後)		
	3回目			○	○			○		○			

表 1 予備実験における各方略の分布

網がけ部分は受け手を意味し、左の一行

目の会話時間は予備実験中にあった、実際の割り込み電話で受け手が話した秒数を示す。報告1

は「電話が切れた」、報告2は「非通知だった」、報告3は「会話内容」を示す。※1は着信後40秒間に計6回（4秒、6秒、2秒、2秒、5秒、5秒）の沈黙があったことを示す。※2は着信後29秒間に計3回（4秒、8秒、3秒）の沈黙があったことを示す。※3は着信後30秒間に計3回（3秒、4秒、2秒）の沈黙があったことを示す。

3. 3. 3 方略と対話への影響

話題転換と沈黙がなかった場合に対話がスムーズであるとし、どのような方略がとられた時にそのスムーズさの効果があるかをみたのが、以下にある、表2.)である。

表中にある「話題転換もサイレンスもない割合」の欄は「対話のスムーズ割合」とし、その割合を分数で示した。

「いやみ」及び「質問」など携帯待ち手の方略は、対話のスムーズさの効果はほとんどない。しかし、逆に同じ待ち手でも「携帯に出てもいいよ」というような「うながし」や、受け手の「電話内容の報告」「話し戻し」といった方略などは、たとえ割り込み電話があったとしても、その後の対話のスムーズさに効果ありという結果になった。「謝罪」に関してはその回数が少なかったことから、はっきりとした影響を見ることは困難だった。

	回数 (/15)	話題転換	サイレンス	話題転換+サイレンス	話題転換もサイレンスもない割合
うながし	2				2 / 2
いやみ	3		1	2	0 / 3
質問	7		1	5	1 / 7
謝罪	4			2	2 / 4
前謝罪	1			1	0 / 1
後謝罪	2			1	1 / 2
両謝罪	1				1 / 1
報告	12			5	7 / 12
報告1	3			2	1 / 3
報告3	4				4 / 4
報告1+2	5			3	2 / 5
話し戻し	9		2		7 / 9
受け手の話し戻し	6		1		5 / 6
待ち手の話し戻し	3		1		2 / 3

表 2 方略とその影響

左側の方略の前謝罪は、割り込み電話に出る前の謝罪を表し、後謝罪は割り込み電話終了後の謝罪を意味する。両謝罪とは、前謝罪と後謝罪の両方したことを表す。網がけの色の付いた部分の意味はない。

3. 3. 4 その他の結果

① 収録後アンケートの答えと実際の言語行動のズレ

収録後、被験者に行ったアンケートの設問7「友人と2人でわりと大事な話をしていた、相手が話している最中に自分の携帯に電話が掛かってきました。あなたはその電話に出たとします。電話を切った後であなたは相手に何かフォローするとしたら、どのようなことをしますか？（自由記述）」の解答と、実際に書き起こしたデータでは、本人の言動が違っている場合があった。設問内容と実験状況が必ずしも一致している訳ではないので断定はできないが、一つの大きな特徴である。

アンケートの解答では、ほとんどの被験者が「ゴメン」と謝ると書いているが、実際に割り込み後の謝罪は、全割り込み15回中3回と極端に少ない。さらに、3回中2回は同一人物（被験者1）の謝罪であり、その2回の内の1回は、本当の割り込み電話（第三者からの電話で会話あり）が掛かってきて33秒間話した後の謝罪である。

② 謝罪

謝罪は、割り込み後の謝罪は15回中3回、割り込み前（携帯電話が鳴った時点で）の謝罪は15回中2回。割り込み前後の両方合わせても30回中5回であり、このうち3回は同一被験者の謝罪である。これは、①携帯電話の割り込み時間が短かったこと、②着信が非通知だったこと、③そのせいで携帯受け手も誰からの電話か分からなかったことなど、これらの要素が謝罪するほどの強い「フェイス侵害」にはならなかったのかもしれない。もう一つの解釈として、④対話中に起こる携帯電話の割り込みが、日常生活の中で「よくあること」として一般に認知されている

可能性も、充分考えられる。しかし、報告の回数は15回中12回と多かった。これは「電話が切れた」という報告1と、「非通知電話だった」という報告2、「間違い電話じゃないか」、もしくは「会話内容を話す」という報告3を合計した数である。割り込み1回に対して、報告1と2の両方をする被験者も4名、延べ5回あった。受け手が対話を中断して電話に出た以上、待ち手のフェイスを侵害したことになる。このため、何らかのポライトネス・ストラテジーをとろうとした結果が、「報告」として現れているのではないだろうか。今回の予備実験で、謝罪回数が報告回数より少なかったことを考えれば、携帯電話の対話割り込みにおけるポライトネス・ストラテジーとしてより効果的なのは、「謝罪」ではなく「報告」だと言えるのではないか。

③ 携帯電話を置く場所

携帯電話を収録の最初から机の上に置いておく被験者が1名、収録途中から置く被験者は2名いた。1人の被験者は、相手の被験者に「また掛かって来るかもしれないから携帯、机の上に出しとき」と促されたためにそうした。

携帯電話を机の上に置くことで、本来プライベートな着信がパブリックな着信となり、電話は2人に掛かって来るもの（共通の認識）として捉えているのかもしれない。特にバイブレーションの場合、着信は本人しか認識できない。これを机の上に置くと、振動の音や光で対話相手も知覚することができる。そうすることで、「電話が鳴った、相手は出るだろう」と待ち手も携帯電話に対して心構え、心の準備ができる。

携帯電話をポケットから出し、対話相手も見える所に置いておく行為は、「突然電話に出られるよりは、まだマシ」解釈もできるが、フェイス理論に照らし合わせると、何度も掛かって来る電話を、共通認識にすることで対話相手に対してのフェイス侵害度を少しでもやわらげたい、という受け手の気持ちの表れではないだろうか。

先ほど「携帯、机の上に出しとき」と言った待ち手は、もう一つ別のポライトネス、「頻繁になる電話出、受け手が感じているであろう待ち手へのフェイス侵害度を、2人の認識とすることで、低くしてあげよう」という、優しさからくるストラテジーなのかもしれない。

④ 話し戻し

話し戻し（話題戻し、話題復帰）という「言語行動」について考察したい。数は、受け手からの話し戻しが15回中6回、待ち手からの戻しが15回中5回とほぼ同じである。話し戻しを1回も行わなかったのが1組あり、3回中3回とも行った組も1組ある。3回の割り込みの後、3回全てで話し戻しを行った組を1例として、以下に挙げる。

I（携帯受け手）： 間違い電話っぽい。（首をかしげて）よく分からん。

それで、何だっけ？。

J（携帯待ち手）： あ〜、そっか。

I ： だから、無いんだよ。

J ： ほーっ、うちは関西系って言うのもあって・・・。

I は「間違い電話っぽい」と報告した後、「何だっけ？。」と話題を元に戻そうとしている。J もそれにつられて、「あ〜、そっか。」と I の一言で割り込み前の話題を思い出した様子である。今回の予備実験では本当の割り込み電話（30秒〜40秒）が15回中3回あったが、話し戻しがあったため話題転換はしていない。さらに興味深いのは、この3回のケースと「質問」の関係である。質問とは、「誰からの電話なのか」など、待ち手が受け手に対し質問することで、本当の割り込み電話があった2組目と5組目の待ち手は、その割り込みが非通知の実験割り込みであっても、一度も質問をしていないのである。これは、個人的な性格によるものなのかもしれないが、質問をしないことで、話し戻しをし易く（スムーズに）しているのかもしれない。

3. 4 予備実験での反省点

携帯電話による割り込みとはどのようなものなのか、他との比較がなかったため、何の効果なのかははっきりとしたことが言えなかった、というのが大きな反省点である。スムーズさの基準もまたあやふやなまま、ただ方略とその数を数え、スムーズかそうでないかを半ば強引に結果を導き出していた。さらに実験前、被験者にメールで「携帯電話を持ってくる下さい」と指示したために、あらかじめそのような実験だと思わせてしまっていた可能性もある。

4 章 本実験 1

この章では本実験で行った、携帯電話呼び出し音による対話割り込みに対する対等性復帰戦略（対話中断に対して人はいかに修復を試みるか）について、その目的と方法、分析結果と考察について述べる。

4. 1 本実験の目的

本実験でも予備実験と同じように、被験者 2 人 1 組で自由対話をしてもらい、その対話途中でこちらから被験者 1 人に電話をかけ、割り込みを起こした。

ただし、予備実験で収録中に被験者が、「電話を切る」「切らせる」ケースもあったため、本実験では手続きの段階から、受け手だけに「収録途中で、指示・連絡することがありますので、携帯電話をお持ち下さい」と指示した（詳しくは 4. 2. 5）。

上記のことから、本実験の目的として、①受け手（携帯電話が掛かってきた方）は、どのようにして電話割り込みに対する対話の衡平性復帰（方略）を行うのか、②待ち手（相手が携帯電話で話すのを待っている方）はそれに対していかに反応するのか、また③携帯待ち手も対等性復帰を行うか、行うとすればそれはどのような方略か、など携帯電話着信時、着信後における反応などをみるのが目的である。さらに、こうしたことから、④対話中に携帯による割り込みが起こっても、スムーズに対話が進む要因は何か、の 4 つを軸とした。

さらに、本実験では予備実験での反省もふまえ、⑤携帯電話による割り込みとそれ以外の割り込みはどのように違うのか、⑥スタンダードな対話と、割り込み前後の対話の違いはなにか、という 2 つを新たな目的として追加した。

4. 2 本実験の方法

以下に、本実験での具体的な方法を示す。

4. 2. 1 被験者

北陸先端科学技術大学院大学の男子学生（22歳～35歳）。

2人1組のペアで4組、計8名。ペアは親しい友人とした。

4. 2. 2 統制条件

本実験では、割り込み電話が対話にどのような影響を与え、一度中断された対話に対し、携帯受け手はどのような対等性復帰方略を試みるかを分析するため、統制条件として、Brown&Levinson のポライトネス理論で重要な、「フェイス侵害度の見積もりの公式」を借り、その三要素（社会的距離、力関係、負荷度）を次のようにした。

「社会的距離（D）」と「力関係（P）」は大学院生の同一学科内で、同じ学年の親しい友人という条件で一定にした。「負荷度（R）」は、対話相手が携帯電話に出ている時間が長いほど、割り込み電話が待ち手に及ぼす「フェイス侵害度（W）」はより強くなると考えられるため、「北國（ほっこく）銀行の時間外音声ガイド（40秒間）」を刺激として流した。また、携帯電話以外の割り込みとして、「目覚し時計のアラーム音（10秒間）」鳴らした。この割り込み形態は、それぞれカウンターバランスをとった。

4. 2. 3 収録日時・場所

日時 : 10月31日(水)～11月9日(金)

場所 : 北陸先端科学技術大学院大学
知識Ⅱ棟6階ディビジョンルーム

タイムテーブル：

対話収録の説明	1分
収録に関する承諾書記入	1分
対話収録	25分
収録後アンケート	10～15分
合計	37～42分

4. 2. 4 対話収録環境と機材

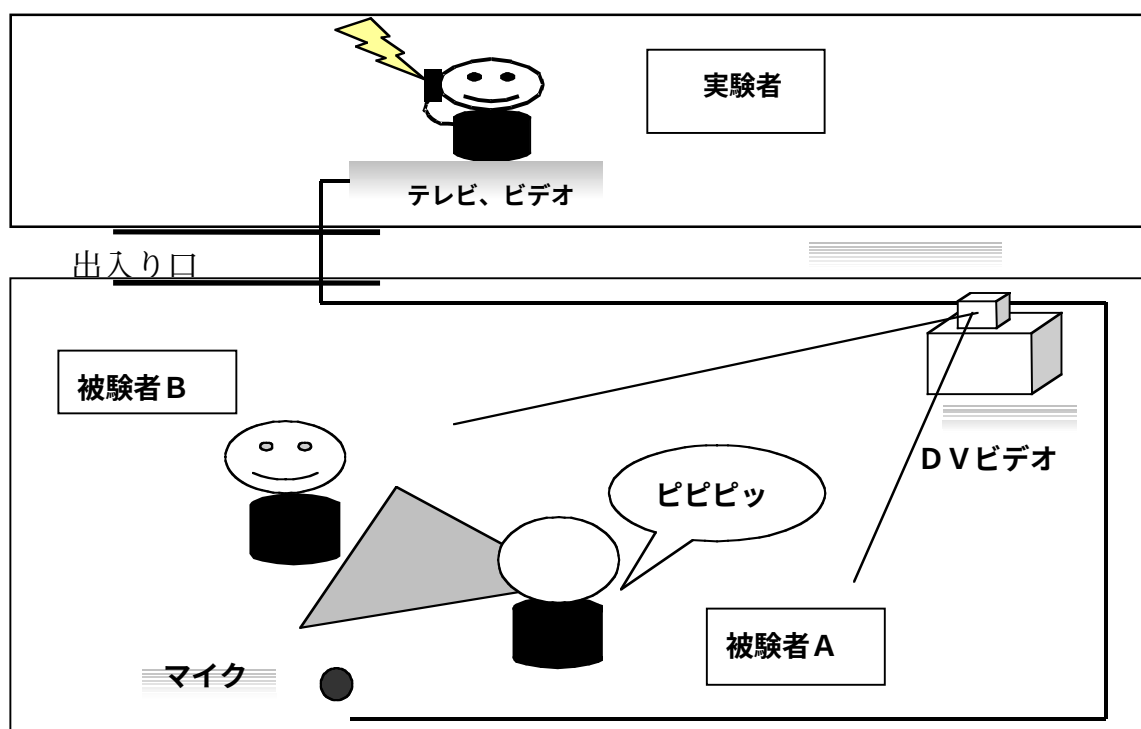


図 3 対話収録環境

三角形状（一辺は1m弱）の机を使用し、被験者には机の角を挟んだ両脇の椅子に座ってもらった。DVビデオカメラ1台を使って被験者2人が同時に映るよう、部屋にあったOHPの上にセッティングした。音声は被験者の背面にある出窓に置き、ブラインドで隠して、映像と合わせてビデオデッキで録画した。収録に使った

部屋はそれほど広くなくなかったため、カメラと被験者の距離は1.5 m～2 m程度だった。

実験者は被験者への教示の後、廊下を隔てた隣の部屋へ移り、ビデオの録画を始めた。収録の間は録画している被験者の会話が漏れないよう、ヘッドホンをしてテレビモニターで観察を続けた。割り込み電話は実験者の携帯電話（Docomo、P501i）を使用し、実験前被験者に記入してもらった承諾書の携帯電話番号を元に、送信者番号通知設定でかけた。

4. 2. 5 収録手続き

収録にあたって、それぞれの被験者にメールで次のような指示を与えた。

<実験前日>

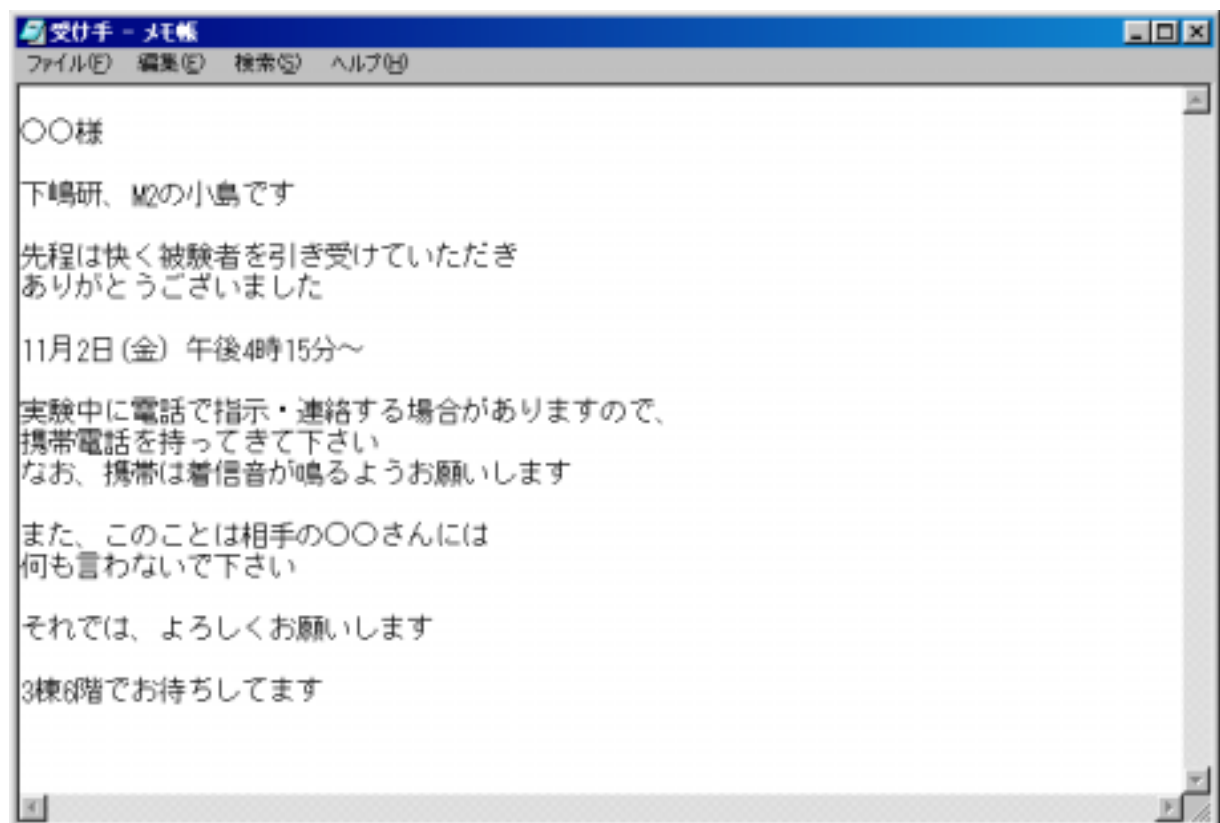


図 4 受け手へのメール支持

待ち手へのメールは、日時と場所だけを書いて送った。

＜実験前の教示＞

① はじめに （被験者条件の確認）

「今日是对話収録にご協力いただきまして、ありがとうございます。」

② 対話収録全体の説明

「本日は、あなた方2人に対話をしていただきます。対話の話題については自由です。どんな話でも構いませんが、ビデオ撮影上立ち上がったりしないで下さい。対話は対面での対話を20～25分行ってもらった後、アンケートに答えてもらう時間が15分、合計35～40分を予定しています。なお、今回の対話収録は個人の思想やプライバシーに焦点を当てるものではなく、人間の認知プロセスに焦点を当てたものですので、なるべくリラックスした状態で行って下さい。何か質問はありますか。」

③ 「対話収録の参加と収録資料公開に関する承諾書」の説明

「対話収録に参加してもらうにあたって、承諾書というものを用意しました。それがこちらです（承諾書を渡す）。内容をよく読んだ上で、納得できればサインして下さい。もし、納得できない場合は、対話収録を拒否してくださって結構です（ボールペンを渡す）。」

④ 対話の課題説明

「それでは、対話収録に入りたいと思います。これからこの部屋で、机の両側に別れて座ってもらい、対話をしてもらいます。これが、2人に話し合ってもらう話題です（対話収録話題の紙を渡す）。どちらでも良いので、ここにかかれているトピックを手がかりにして、自由にトークして下さい。何か質問はありますか？」

＜実験終了後の教示＞

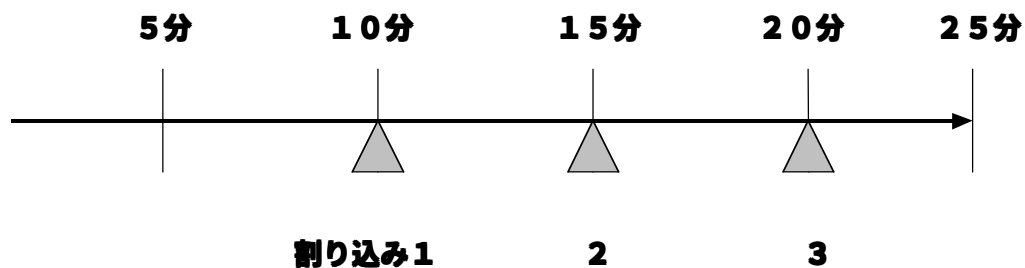
⑤ アンケートの説明

「お疲れ様です。それでは最後に、こちらのアンケートに答えていただきます（アンケート用紙とペンを渡す）。携帯電話の使用頻度と、ある場面での対応、今回行っ

た対話収録の感想です。何か質問があれば、その都度お答えします。アンケートが
終わり次第、今回の実験は終了です。何か質問はありますか。」

4. 2. 6 割り込み回数と時間

携帯電話による割り込み回数と、割り込みの時間は以下の通りである。



対話収録時間 : 2 5 分
割り込み回数 : 3 回 (1 0 分、1 5 分、2 0 分の 5 分間隔)
割り込み時間 (携帯) : 1 0 ~ 4 0 秒 (相手が切るまで)
割り込み時間 (目覚まし) : 1 0 秒 (相手が切るまで)
割り込み形態 : 番号通知設定でかけ、相手が切るまで刺激を流す

対話収録時間は、対話のスタンダード時間として話し始めの 5 ~ 8 分の 3 分間を
設けたため、全体を 2 5 分間と予備実験よりも 5 分間延ばした。

割り込み回数は、前回行ったアンケート結果から、短時間に何度も電話が掛かっ
てくることを不愉快に思うという傾向があったため、2 5 分間で 3 回とした。また割
り込み電話をかけるタイミングは 5 分間隔と時間で統一した。ただし、電波の都合
で毎回正確にかけることはできなかった。(最大 3 0 秒の遅れ)

割り込み時間 (携帯) は、被験者が電話に出てから切るまでとした。その結果、
被験者によって電話に切るまでの時間が最短で 1 0 秒 (机の上に携帯電話が置いて
あった場合)、最長で 4 0 秒 (音声ガイドが終わるまで聞き続けた場合) だった。

割り込み時間（目覚まし時計のアラーム音）は、出入り口のドアの外から10秒間鳴らした。

割り込みの形態は、予備実験の結果から、日常非通知設定で電話が掛かってくることが少なく、被験者に「実験者が掛けたのでは」という疑いを持たれ、実験意図がわかってしまうのを恐れたため、番号通知設定にした。

また、被験者が持っている携帯電話の着信音設定は、実験前のメールの指示で知らせた通り、着信音（着信メロディー）にしてもらった。これは統制条件の一つとして、着信音とバイブの違いからくる、被験者の反応の違いを無くすためである。

4. 3 結果と考察

以下に、本実験1の結果と考察を示す。

4. 3. 1 結果

- ① 受け手である被験者が、実験の意図（対話中に携帯電話を掛けて、対話に割り込んだ時の反応を見たい）を収録中、待ち手に話してしまった。（1組）
- ② 携帯電話を持ってこなかった。（2組）
- ③ 実験者の研究を（中間発表を見たため）知っていた。（1組）

4. 3. 2 考察

結果①の考察として、事前にメールで「対話収録中に、指示・連絡することもありますので携帯電話をお持ち下さい」、「着信音がなるように設定して下さい」、「相手の方には何も言わないでください」と指示してしたことで、受け手に実験の意図を予想させてしまったと思われる。また、「北國銀行の音声ガイド」を流したことで、普段掛かってこない電話内容だったことも、被験者に怪しまれる要因となったのだろう。

結果②の「携帯電話を持ってこなかった」は、1組は実験の直前まで研究室のゼミがあったことから、急いで実験に参加してくれたために、忘れてしまったみたいである。もう1組の被験者は、承諾書を書いている時に「携帯を机に置いてきてしまいました」、また「最近新しい携帯電話に変えたので、自分の番号がわからないし、操作の仕方もわかりません」と話していた。この被験者が携帯電話を忘れた理由として、「実験に協力します」と了承してくれた直後に実験を行ったため、直前にメールを送ることとなり、読んでくれていなかったことも考えられる。

結果③は実験終了後のアンケート記入時に、待ち手である被験者が「これをやったら、家族の崩壊が防げるんですよね」と発したために、中間発表（実験者の修士研究）を聞いていたことがわかった。

これら①～③の結果以外に、「目覚し時計のアラーム音」は割り込み手段として、「効果は小さい」ということがわかった。これは、普段から聞き慣れているためか、音が一定（「ピピッ、ピピッ」）で小さかったためか、10秒間しか流さなかったからか、はっきりとした理由は定かではないが、どの被験者も「目覚し時計」の音を無視して話し続けていた（もしくは、その音さえも「実験だ、実験だ」と話題にしていた）。

4. 3. 2 反省

反省すべきこととして、予備実験での反省を活かそうとしたのは良かったが、携帯電話の割り込みの何をみたいかということが、はっきりとまとまっていなかった。そのため、実験意図が被験者にも予想されることが充分考えられる、「メールでの指示」や、刺激に使った「音声ガイド」、「実験スケジュールの管理（実験協力の了承後、時間を空けずに実験をする）」、「被験者（バイアスが掛かっていない学生）採しと、その選定」などの様々な失敗が起こった。

これらの結果からこの4組を分析の対象から外し、本実験をやり直すことにした。

5 章 本実験 2

5 章では本実験 2 で行った、実験の目的と方法、分析結果と考察について述べる。
また、本実験 1 と同じ部分（収録環境や機材など）は割愛した。

5. 1 本実験の目的

実験の目的として、予備実験、本実験 1 と異なる点は、①スタンダード対話（話し始め 5～8 分の 3 分間）と、割り込み対話（前 1 分、後 2 分の 3 分間）の違いを明確にすること、②ディスコース・ポライトネスで一つの構成要因となっている話題導入頻度は、スタンダード対話と割り込み対話で比べたときの差を分析することである。

本実験 2 では先行研究がない、携帯電話の割り込みが対話に及ぼす認知的な影響と、受け手（もしくは待ち手）は、中断した対話をどのような方略を使って復帰させるか、ということを調べるのが第一の目的であるため、目覚し時計など他のものの割り込みと、携帯電話の割り込みについて比較することを目的とはしなかった。

5. 2 本実験の方法

以下に、本実験 2 での具体的な方法を示す。

5. 2. 1 被験者

北陸先端科学技術大学院大学の大学院生（22 歳～32 歳）。

2 人 1 組のペアで 12 組、計 24 名（男子 10 組、女子 2 組）。

ペアは親しい友人とした（男子の 1 組だけ、同学科・同学年の初対面同士）。

5. 2. 2 統制条件

統制条件として本実験1と異なる点は、「負荷度（R）」である。対話相手が携帯電話に出ている時間が長く、かつ話しの内容がわからないほど、割り込み電話が待ち手に及ぼす「フェイス侵害度（W）」はより強くなると考えられるため、実験の刺激として「モデム接続音（以下モデム音）」を20秒間流した。

5. 2. 3 収録日時・場所

日時：11月9日(金)～11月21日(水)

場所、タイムテーブルは本実験1に同じ。

5. 2. 4 収録手続き

収録にあたって、それぞれの被験者にメールで次のような指示を与えた。

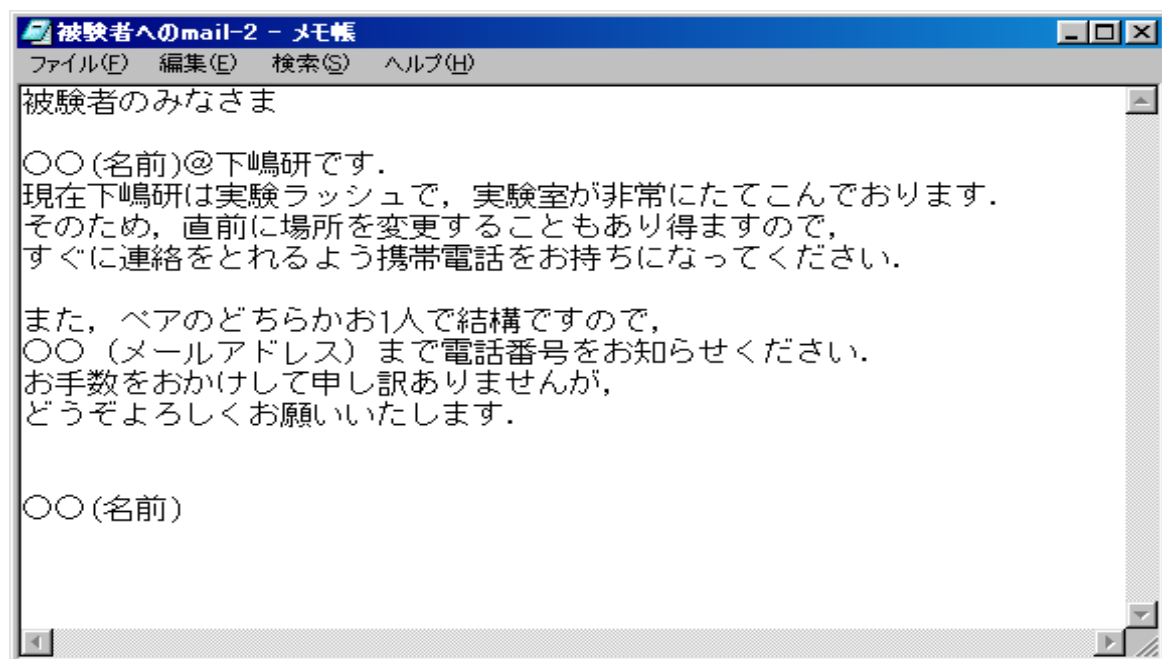


図 5 被験者へのメール指示（本実験2）

＜実験前後の教示＞は、本実験1と同じ。

5. 2. 5 割り込み回数と時間

携帯電話による割り込み回数と、割り込みの時間は以下の通りである。

対話収録時間	:	25分
割り込み回数	:	3回（10分、15分、20分の5分間隔）
割り込み時間（携帯）	:	10～40秒（相手が切るまで）
割り込み形態	:	番号通知設定でかけ、相手が切るまで刺激を流す

対話収録時間は25分間で、割り込み回数は3回で5分間隔。ただし電波の都合上、毎回正確にかけることはできなかった。（最大で25秒程度の遅れ）

割り込み時間（対話中断時間）は、被験者が電話に出てから切るまでとした。その結果、被験者によって電話に切るまでの時間が最短で1秒（手に携帯電話を持っていた場合）、最長で23秒（モデム音が終わり、切れた後も聞きていた場合）、平均9.83秒だった。

また、被験者が持っている携帯電話の着信音設定は、予備実験と同じように実験前に実験内容の予想を防ぐため、こちらからの指示はしなかった。

5. 3 分析方法

以下に、分析対象者の選定、及びその基準と分析方法について示す。

5. 3. 1 分析対象者の選定

本実験2でも、1回目に電話が鳴った時点で携帯の電源を切る被験者が2組いた。その内の1組は2回目の割り込みで、1回目に待ち手だった被験者へ同じ携帯電話

で掛けてしまったことから、「同じ相手からの電話だ」と被験者が確認し合い、実験の意図がわかってしまった。もう1組は、2回目の割り込みから「非通知」で掛けたため、実験の内容が被験者にわかることはなかった。

別の3組はモデム音をFAX送信音と思い、「携帯でFAXを流すことなどありえない」と実験の意図を予測し、実験の内容についての話題を話し始めてしまった。

また、初対面ペアの受け手は、実験終了後「人と話すときは携帯電話が掛かってきても、出ない」と述べており、割り込みではマナーモードだったため、実際に実験者も掛かっているのかどうか判定できず、2度目、3度目の割り込みは部屋に備え付けてある、内線電話をかけた。

被験者が、実験の意図を予測する（しない）、もしくはわかる（わからない）などの判定は、被験者が話題として実験の話をした（しない）、ということを判断基準とした。

これらの結果、分析の対象として使ったのは男子7組、女子2組の計9組（2回目の割り込みから、受け手と待ち手が変更した組も分析対象とした）である。

5. 3. 2 文字化について

録画した実験データを書きお越しするにあたって、宇佐美、西郡の両氏が論文（宇佐美、1996）で、東京外国語大内のウェブページで、提唱する「基本的な文字化の原則（Basic Transcription System for Japanese：BTSJ）」を参考にした。

BTSJは、近年、自然会話を対象とする会話分析の研究が盛んに行われるようになってきたことから、以下の点に注意して考案された。（以下wwwから引用）

- ① 研究の視点を得るために、読みやすいものであること。
- ② 定量的分析に適するものであること。
- ③ よって、データベース化がしやすく、記号等によって検索がしやすいものであること。
- ④ コーディングが「発話文」単位でできること。（発話文の定義は後出）

- ⑤ 対人機能に重要な役割を果たすと考えられる周辺言語情報は、ト書き的にして、なるべく多くを記しておくこと。

「発話文」は、以下のように定義する。

実際の会話における話し言葉では、いわゆる文中にあいづちが入ったり、文末が省略されたりすることが多い。また、文法的には一単語に相当するものが、実質的機能を担っている場合もある。よって、ここでは、いわゆる「一語文」や、述部が省略されているもの、或いは、最後まで言い切られていないものなども、「一発話文」として扱い、発話文ごとに改行する。ただし、何かを思い出そうとする時などに用いられる、「フィラー」としての「そうですねえ」などは、「あのう」などと同じく、後続部とまとめて一発話文と数える（例4）。

また、逆に、途中で相手のあいづちなどが入って、話者が一旦交替してラインが変わっても、同一話者によって発せられた、構造的に「文」を成していると捉えられるものは、それら数行をまとめて「一発話文」と数える。

例4 A：じゃ、それはじゃあ学内の方でもかなり使ってらっしゃる、んでしょうか？。

B：そうですねー、あの、ごく一部ですね。

（以上、www からの引用）

上記の例に従い、スタンダード対話3分、割り込み対話3分（割り込み前1分、後2分）＊3回（割り込み回数）を9組分、書き起こした。またB T S Jにはない、時間（電話着信時、通話開始時、通話終了時）を独自に組み入れ、対話内容ごとに付ける通し番号は削除した。

6 章 結果

6 章では、本実験 2 で得られた結果を示す。

詳しい結果を述べる前に、分析対象とした被験者の組数と携帯電話による割り込み時の状況、その応答（出る、出ない）の総計を記す。

被験者数と組	：	9 組 18 名 (男子 7 組、女子 2 組)
総割り込み数	：	25 回 (1 組目、2 組目が 4 回、8 組目、10 組目は 1 回のみ) (7 組目の被験者は、2、3 回目の受け手が変更)
被験者の状況	：	着信音（着メロ）での割り込み 6 回 バイブレーションでの割り込み 19 回
割り込みに対する応答	：	電話に出た回数 13 回 出なかった回数 12 回 1 回も出なかった被験者 1 名 3 回とも出た被験者 2 名

その他 　：　 始めから携帯電話を机の上に置いていた被験者 　：　 1 名
　　　　　 割り込み 2 回目以降、携帯電話を机の上に置いた被験者 　：　 2 名

6. 1 方略の分類について

以下は本実験 2 で観察された受け手、待ち手の方略の説明である。方略とは携帯電話による割り込みの後、被験者がその掛かってきた電話について言及した発話（携帯イベント発話）のことであり、それを受け手、待ち手のターンごとに取り出し分

類した。被験者の長いうなずきや笑い、それ以外の発話や携帯電話に関する一般的な発話は携帯イベント発話として扱わなかった。

6. 1. 1 受け手の方略

1	中 断 発 話	6	報 告	11	疑 問
2	中 断 依 頼	7	推 測	12	反 省
3	通 話 要 求	8	拒 否	13	不 平
4	出 る 発 話	9	電 源 オ フ 発 話	14	感 想
5	謝 罪	10	質 問		

表 3 携帯イベントに関わる受け手の方略の種類

受け手の方略（携帯イベント発話）は下記の通り、①中断発話、②中断依頼、③通話要求、④出る発話、⑤謝罪、⑥報告、⑦推測、⑧拒否、⑨電源オフ発話、⑩質問、⑪疑問、⑫反省、⑬不平、⑭感想と、計14種類ある。（表3参照）

以下にいくつかの例を示しながら、それぞれの方略について説明する。なお例中の「受け」は受け手を「待ち」は待ち手を表す。また、実験データを書きお越す際に使用した「B T S J」は、発話の表記が読みにくい部分もあるのでここでは簡略化したものを示す。

① 中断発話

携帯電話呼び出し音のあと、受け手が内容上それまでの対話の文脈にそぐわない発話をする事。

待ち 効率よく減らしてほしいよね。

受け おれら出たあとだったら、別にいいんだけど。

受け あっ、なんだ？、電話が鳴ってる。

待ち 電話？。

例では被験者の二人は携帯電話が鳴るまで、授業の単位の話をしていた。そこに割り込み電話が入り、受け手が今までの対話とは内容上関係のない「電話が鳴って

る」という発話をしたことで、授業単位の対話は中断されてしまったのである。このような発話を「中断発話」と定義し、その他の例として「また？」や「ちょ、ちょ、ちょっと」などがある。

② 中断依頼

携帯電話呼び出し音のあと、受け手が待ち手に対しそれまでの対話を一時的に中断することを依頼する発話。

待ち すっー、3年の頃か。
受け えっ、3年って大学の？。(うん)
受け えっ、最近なの？、じゃあ。(うん)
受け ちょっと待ってよ。

例では被験者の二人は携帯電話が鳴るまで、待ち手は趣味をいつごろから始めたかという話をしていた。そこに割り込み電話が入り、受け手が「ちょっと待ってよ」と発話することで、それまでの対話を一時的に中断すること（少し待って欲しいこと）を待ち手に依頼している。このような発話を「中断依頼」と定義し、その他の例として「ちょっと待ってくれ」や「あっ、ちょっと待って」などがある。

③ 通話要求

携帯電話呼び出しのあと、受け手が「出たい」もしくは「出て良い？」と待ち手に対して要求する発話。

待ち ひさびさに聞いたじゃん、そういう怖い話っていうか、
受け うん、あっ、ちょっと待って。
受け いい？。
待ち あっ、いいよ。

例では割り込み電話が入り、受け手は「ちょっと待って」と中断依頼をした後すぐに、「(電話に出て) いい？」と電話に出たいことを待ち手に要求している。このような発話を「中断依頼」と定義し、その他の例として「ちょっといい？」がある。

④ 出る発話

携帯電話呼び出し音のあと、受け手が待ち手に対して電話に出ることを宣言する発話。もしくはかけ直すことを宣言する発話。

受け まずったかなー？。

待ち うーん。

受け うわっ。

受け 一応、出るか。

例では携帯電話が鳴るまで、受け手はある人に「学生寮に無線LANが必要かどうか」の意見を求められ「必要ない」と結論したことを、受け手に「(その結論は)まずったかなー？」と聞いている。そこに割り込み電話が入ったことで、受け手は「うわっ」と驚き(中断発話)、しばらく沈黙した後「一応、出るか」と宣言してから携帯電話に出ている。このように、「携帯電話に出ること」を待ち手に宣言する発話を「出る発話」と定義し、その他の例として「ちょっと、今でんわしてみるわ、こっちから」など、これから電話をすること、かけ直すことを宣言する発話も「出る発話」とする。

⑤ 謝罪

携帯電話が鳴ったこと、携帯電話に出たことに対して受け手が待ち手にする謝罪。

受け うん、ちょっと、携帯やばいから消しとこう。

待ち あははっ。＜笑い＞

受け ／沈黙 3秒／すいません。

待ち いいよ。

例では割り込み電話が入った後、受け手が電源オフ発話(⑨で説明)をし、電話が鳴って話を中断させたことに対し「すみません」と待ち手に謝罪している。このような発話を「謝罪」と定義する。また例中の／沈黙3秒／は、受け手は携帯電話を床にあるバックに閉まっているために、できた沈黙である。

⑥ 報告

発信者、通話内容、掛かってきた理由について受け手が待ち手に報告すること。
またはそれらについての待ち手の質問に対する答えとしての発話。（「相手が誰かわからない」、といった発話も含む）

待ち どーしたの？、ん？。

受け ／沈黙 3秒／なんか、よく分からない音が流れてる。

待ち えっ？、電波立ってる？。

受け うん、電波たってるよ。

例では受け手が携帯電話に出た後モデム音を聞き、携帯電話を少し耳から遠ざけたために、待ち手が「どーしたの？」と質問した。受け手はこの質問を受けて「なんか、よくわからない音が流れてる」と返答している。このような発話を「報告」と定義する。例中ではさらに待ち手の「電波立ってる？」の質問に、受け手は「うん、立ってるよ」と報告をしている。これ以外の、質問に対する返答ではない場合（待ち手の質問前の発信者や通話内容に関する発話）も「報告」として扱う。その他の例として「えっと、全然わからないです、誰か」や「切れた、わけわからん」などがある。

⑦ 推測

発信者、通話内容、掛かってきた理由について、受け手が推測予想する発話。

待ち その中で、なんとかなんとかを見付けるのは難しいの？、やっ
ぱり。

待ち ／沈黙 1秒／おいっ。

受け ふふっ、ちょっとまってくれ、

受け たぶんそうだ、(人名) くんた、絶対。

例では被験者の二人は携帯電話が鳴るまで、研究の話をしていた。そこに割り込み電話（ここではバイブ）が入り、受け手は何も言わず（中断発話もなく）電話に出ようとしたために、待ち手は「おいっ」と言っている。その後受け手は中断依頼をし、続けて誰からの電話かを予想して「たぶんそうだ、(人名) くんた、絶対」と発話している。このような、誰からかかってきた電話かなどを推測する発話を「推測」

と定義し、その他の例として「いや、それか、電話がマジで壊れたか」や「なんか、J-phone かなんか、会社からかも」などがある。

⑧ 拒否

携帯電話呼び出し音のあと、受け手がその呼び出しに応えないこと、待ち手のうながしや質問を拒否することを宣言する発話。

待ち いや、出ましょうか？。
受け いえ、いや・・・
待ち 出ちゃまずい、相手でしたら、
受け 出なくていい、ですー。

例では割り込み電話の後、受け手は電話に出ることも切ることもしない状態であった。そこで待ち手が「(私が) 出ましょうか？」と質問するが、受け手は「いえ、いや…」と拒否している。その後も、待ち手に対して「(電話に) 出なくていいです」と、呼び出しに応えないことを宣言している。このような発話を「拒否」と定義し、その他の例として、「もういいや、マジ」などがある。

⑨ 電源オフ発話

携帯電話の電源を切る、マナーモードにするという受け手の発話。

受け ちょっと、ごめん。
待ち あー、うん、携帯か。
受け うん、ちょっと、携帯やばいから消しとこう。
待ち あははっ。＜笑い＞

例では割り込み電話の後、受け手は「ちょっと、ごめん」と中断依頼し、待ち手も中断の理由が携帯電話であることに気付く（「あー、うん、携帯か」）。中断依頼の後、受け手は「うん、ちょっと、携帯やばいから消しとこう」と携帯電話の電源、もしくは着信音を切る宣言をしている。この発話を「携帯電源オフ発話」と定義し、その他の例として「着信音量切ればいいし、##切っちゃえ（#は聞き取れない発話）」や「携帯壊れたので、切ります」などがある。

⑩ 質問

発信者、通話内容、掛かってきた理由について、受け手が待ち手に返答を求める疑問形の発話。

受け /沈黙 6秒/ やっぱ、携帯こわれた。

受け /沈黙 4秒/ と思わん？。

待ち いやーねー、イタ電じゃ、ないんだよ。

受け /沈黙 1.5秒/ なんて、かえそう？。

例では受け手が携帯電話に出てモデム音を聞き、自分の携帯電話が壊れたと思い（「やっぱ、携帯こわれた」）を「と思わん？」と、待ち手に問い掛けている。このように、受け手が待ち手に対して発信者や通話内容など（この例の場合は自分の携帯電話の状態に関すること）疑問の形で返答を求める発話を「質問」と定義する。その他の例として「なんで、FAXにつながったの？」や「ここの部屋、なんかおかしいのかな？」などがある。

⑪ 疑問

発信者、通話内容、掛かってきた理由について、受け手が待ち手に返答を求めない疑問形の発話。

受け 知らないやつだなー、電話。

待ち /沈黙 3秒/ はっ、はっ、はっ。

待ち 電話切れー。

受け ちゃ、ちゃんと、応答入れてくれたかな？。

待ち さいあくー。

例では受け手が割り込み電話の電話番号を見て「知らないやつだ」と報告する。その後待ち手は「電話切れ」と言うが、受け手は「ちゃんと応答入れてくれたかな？」と発信者に対して疑問に思っている。この場合は、受け手が待ち手へ自分の疑問に対する返答を求めていることから、「質問」とは区別した。受け手が待ち手に返答を求めない疑問形の発話を「疑問」と定義し、受け手の発話内容の意味やその後の

待ち手の返事などからそれを判断した。その他の例として「誰だろう？こんな時間に電話かけてくるなんて」や「なんでかなー？」などがある。

⑫ 反省

受け手が待ち手に対して謝罪するのではなく、被験者としての反省の発話。

受け 被験者でありながら。
待ち はははっ。＜笑い＞
受け 想像できると思うけど。
待ち あっ、(人名) ちゃん？。

例で受け手は割り込み電話には出ずに切っている。その後で受け手は「被験者でありながら（申し訳ない）」と待ち手ではなく、実験者に対して反省の発話をしている。このような発話を「反省」と定義し、その他の例として「こんな時に電話が」などがある。

⑬ 不平

携帯電話呼び出しに関する受け手のネガティブな感想、不平・不満を表す発話。

待ち 一緒やね、さっきと、なんなんだろう？、それ。
受け うるせーなー、こいつ。
待ち ふふふっ。＜笑い＞
受け わけわからん、あたまきた、今。

例は割り込み2回目の発話例であり、待ち手が「さっきと一緒だね、何だろう？それ」と質問しているが、受け手は質問に対する返答ではなく、発信者に向かって「うるせーな、こいつ」とネガティブな感想を発している。その後も「あたまにきた」など、このような発話を「不平」と定義し、その他の例として「なんか、いらだってきた」などがある。

⑭ 感想

携帯電話呼び出しに関する受け手のネガティブではない感想。

受け もしもし。

待ち それ間違っさー、FAX送信してない？。

受け うん、なぞ。

受け あははっ。＜笑い＞

例では受け手が「もしもし」と割り込み電話に応答した後、待ち手が「FAX送信してない？」と予想している。それに対する受け手の返答として「うん、なぞ」という発話がある。このように、「不平」のようにネガティブではない発話を「感想」と定義し、その他の例として「ですよね？（電話があるような）用事もあんまり（ないし）」や「（留守電に）入れてくれんな、誰かわからない。」などがある。

6. 1. 2 待ち手の方略

1	中断依頼許諾	6	中断依頼拒絶	11	感想	16	質問
2	通話要求許諾	7	通話要求拒絶	12	納得	17	報告
3	謝罪許諾	8	謝罪拒絶	13	いやみ		
4	出る発話許諾	9	出る発話拒絶	14	気付き		
5	うながし	10	禁止発話	15	推測		

表 4 携帯イベントに関わる待ち手の方略の種類

待ち手の方略（携帯イベント発話）は、①中断依頼許諾、②通話要求許諾、③謝罪許諾、④出る発話許諾、⑤うながし、⑥中断依頼拒絶、⑦通話要求拒絶、⑧謝罪拒絶、⑨出る発話拒絶、⑩禁止発話、⑪感想、⑫納得、⑬いやみ、⑭気付き、⑮推測、⑯質問、⑰報告と計 17 種類あり、その特徴として①～⑤の許諾グループと⑥～⑩の拒絶グループに別れる。（表 4 参照）

以下にいくつかの例を示しながら、それぞれの方略について説明する。なお例の読み方は受けての方略と同じだが、例のない方略については最後でまとめて扱う。

② 通話要求許諾

受け手の通話要求に対する許諾。

待ち ひさびさに聞いたじゃん、そういう怖い話っていうか、
受け うん、あっ、ちょっと待って。
受け いい？。
待ち あっ、いいよ。

例は受け手が待ち手に「怖い話」をしている最中に、割り込み電話がかかってきたものである。受け手は「ちょっと待って」と中断依頼に続けて「いい？」と通話要求している。それに対する待ち手の返答として「あっ、いいよ」という発話がある。このような通話要求に対する許諾を、「通話要求許諾」と定義する。

③ 謝罪許諾

受け手の謝罪に対する許諾。

受け ／沈黙 3秒／すいません。
待ち いいよ。
受け 被験者でありながら。
待ち はははっ。＜笑い＞

例で受け手は、割り込み電話に出ずに「電源オフ発話」をして携帯電話を切った後、待ち手に対し「すみません」と謝罪している。それに対する返答として「いいよ」という発話があり、このような謝罪に対する許諾を「通話要求許諾」と定義する。

⑤ うながし

受け手が通話要求する前、もしくは受け手がなかなか電話に出ない場合に、待ち手が「出ても良い」という許諾をすること。

受け いや、(人名) さんの携帯・・・、

待ち あっ、出る？、
受け だったらたぶん・・・、
待ち 出ま、とりあえず出ましょ、それはもう。

例で割り込み電話の後、受け手は電話に出ることも切ることもしない状態であり、待ち手が「(人名)さんの携帯からかも？」と予想するが、受け手は「いや、(人名)さんの携帯…、だったらたぶん…(番号通知されるはず)」と受け手はしまった電話を再び開き(折りたたみ式の携帯)ディスプレイを見るが、なかなか電話に出ようとしない。待ち手はそれに対して「とりあえず出ましょ」と電話に出ることを勧めている。この発話を「うながし」と定義し、その他の例として「いや、いいんじゃない？(電話に出ても)」や「出ましょ」などがある。

⑦ 通話要求拒絶

受け手の通話要求に対する拒絶。

受け 誰だよ、てめー。
受け ちょっといい？。
待ち だめ。
受け だめか、誰だろ？。

上記は2度目の割り込み電話時の対話例であり、受け手は「誰だよ、てめー」と言った後に「ちょっと(電話に出て)いい？」と通話要求している。これに対して待ち手は「だめ」と要求を拒絶していることから、このような通話要求に対する拒絶の意味の発話を「通話要求拒絶」と定義する。

⑩ 禁止発話

「出てはダメ」、「電話切れ」など受け手が通話することに対する禁止発話。

受け 知らないやつだなー、電話。
待ち /沈黙 3秒/はっ、はっ、はっ。
待ち 電話切れー。
受け ちゃ、ちゃんと、応答入れてくれたかな？。

例における待ち手の「電話切れー」という発話は、受け手の「通話要求」や「中断依頼」に対する返答としての拒絶ではなく、受け手が携帯電話を手放さないことや要求なく突然電話に出ようとするものに対するものであり、このような発話を「禁止発話」と定義する。

⑪ 感想

携帯電話呼び出しに関する、待ち手のネガティブではない発話、意見。

受け だから、なんだっつーの、この携帯。

待ち すごいね、その携帯。

受け なんか、いらだってきた。

待ち 知り合い？。

例で受け手は「なんだっつーの、この携帯」と「不平」を発しており、何度も掛かってくる電話に対する待ち手の意見として「すごいね、その携帯」と発話している。このようにネガティブではない待ち手の発話を「感想」と定義し、その他の例として「出ないとずっと来ますよ、それ」や「いやーねー、イタ電じゃないんだよ」などがある。

⑫ 納得

受け手の予想もしくは報告に対する返答として、待ち手が納得・理解を示した発話。

受け たぶんねー、昨日の車検の人だと思う。

待ち あ、なるほどね。

待ち はははははっ。＜笑い＞

受け 鼻水。

例では、受け手の「車検の人だと思う」という発信者の予想に対して、受け手は「あ、なるほどね」と理解を示した発話をしている。「感想」とは違い、このように受け手の予想や報告に対する待ち手の返答として、積極的に理解を示す発話を「納

得」と定義する。その他の例には「FAXやな」や「そうなんだ」などがある。

⑬ いやみ

携帯電話呼び出し、もしくは通話に関する待ち手のネガティブな感想、不平・不満を表す発話。

待ち それをねー、これ何するんだろうかーと思ってね、
受け ちょっ、ちょっ、ちょっと、
待ち なにしてんの？、遅刻した上に携帯鳴らしてんの？。
受け 携帯鳴らして、電話・・・、聞いていいのかな？。

例ではセミナーに参加した時のことを待ち手が話していた時に割り込み電話になり、受け手は「ちょ、ちょ、ちょっと」と「中断発話」している。しかし、待ち手は受け手に対して「なにしてんの？、(実験に)遅刻した上に携帯鳴らしてんの？」と発話している。このような携帯電話の呼び出しや通話に対する不平・不満を表すネガティブな感想を「いやみ」と定義する。他にも、「おいっ」や「バカだねー、あんた」などがある。

⑭ 気付き

待ち手が携帯電話呼び出し音に気付き、反応した発話。

受け ビールとか、いろいろ。
待ち 参加費は、どこが・・・、何か「ブルブル」鳴ってる。
受け 参加費は、(人名)先生が・・・、
受け 携帯が鳴ってるんですけどね、(はあ)

例で被験者二人は授業のセミナーに参加した場合の話をしている時に割り込み電話が鳴った(バイブ)が、受け手はすぐに携帯電話を取り出さなかった。その後、待ち手は振動音に気付き「何かブルブル鳴ってる」と発話しており、受け手も「(実は)携帯が鳴っている」と「報告」している。このように待ち手が携帯電話の呼び出し音に反応した発話を「気付き」と定義する。

⑮ 推測

発信者、通話内容、掛かってきた理由について待ち手が推測する発話。

待ち あははっ、誰から？。

受け いや、わからん。

待ち たぶんねー、その、番号FAXだと思ってかけてんでしょ。

受け あー。

例では、待ち手が割り込み電話の相手が「誰から？」と質問し、受け手は「わからない」と応えている。その後で待ち手は「たぶんねー、その番号FAXだと思ってかけてんでしょ」と発信者について推測しており、このような発話を「推測」と定義する。その他の例として「たぶん、間違ってる人にやってるんだと思うんで」や「何かたぶん、電話番号押してFAX送信してるんだよ」などがある。

⑯ 質問

発信者、通話内容、掛かってきた理由について待ち手が、受け手に返答を求める疑問形の発話。

待ち 番号で分かっているんじゃないですか？、うすうす。

受け 分かってないですよ、マジで。

待ち いや、つい、お店のなんかに書きちゃったとか、ないですか？。

受け いや、分かんないんですよ。

例では受け手の「発信相手が誰かわからない」という「報告」に対して、待ち手は「番号で誰かわかるんじゃないですか？」と疑問を投げかけている。その後受け手の「わからない」という返答に対しても、続けて「お店の何かに（電話番号）書きちゃったとか、ないですか」と受け手に返答を求める疑問形の発話をしている。このような発話を「質問」と定義し、その他の例として「どーしたの？」や「誰？、会社？」などがある。

⑰ 報告

発信者、通話内容、掛かってきた理由について待ち手が受け手にする報告。

待ち あ、でも、き、き、切る音はわかる、“ガチャ、ガチャ”って切られた。

受け マジで？。

待ち 電波、ないがんじゃねーの？、1本か2本しか立たないやん。

受け ここの部屋、なんか、おかしいのかな？。

この例は、何度も同じモデム音での割り込みを不思議がった受け手が、待ち手に携帯電話を手渡したために、待ち手もその音を聞き「あ、でも、切る音はわかる」と発話したものである。実験中、受け手が待ち手に携帯を渡してモデム音を聞かせたものは上記の一例のみであるが、この場合も通話内容に関する待ち手の発話のため「報告」と定義する。

以下の5つの方略（許諾2つ、拒絶3つ）は受け手のとる方略に対応して理論的に可能であるが、今回のデータ中には発話例がなかった。

- ① 中断依頼許諾 : 受け手の中断依頼に対する許諾。
- ④ 出る発話許諾 : 受け手の出る発話に対する許諾。
- ⑥ 中断依頼拒絶 : 受け手の中断依頼に対する拒絶。
- ⑧ 謝罪拒絶 : 受け手の謝罪に対する拒絶。
- ⑨ 出る発話拒絶 : 受け手の出る発話に対する拒絶。

6. 1. 3 携帯電話イベント外の方略

実験中にかかってきた携帯電話に言及した発話以外の方略として受け手、待ち手に関係なく次のようなものがある。

① 携帯派生話題の導入

携帯電話呼び出しによって喚起された新しい話題を、どちらかが導入すること。

待ち だって、留守電にもしてないんでしょ？。

受け 留守電、そう、留守電にするの忘れてた。

受け 誰だろう？。
待ち あー、でも、最近はなんです、そういう携帯の何でしたっけ？、
メールじゃないやつが、あるらしいじゃないですか。
受け メールじゃないやつ？。

例では待ち手の「質問（留守電にしていなくてしょ？）」、受け手の「報告（留守電にするのを忘れた）」「誰だろう？（疑問）」と「携帯イベント発話」の連続から、待ち手の「最近はなんです、そういう携帯の…」という最近の携帯電話メールの話題に移行している。これは携帯割り込みによって喚起された、直接割り込み電話に言及した発話ではない新しい話題の導入であり、このような話題変換を「携帯派生話題の導入」と定義する。この他の例として「いや、うちの親ならメール来るよ、メールやっと思えるようになったから」や「やだー、すごい怖いんだけど、最近これ、087の」などがある。

② 割り込み前の話戻し

携帯電話呼び出し前に話していた話題にどちらかが戻す、戻そうとすること。

受け (人名) かもしれない。
待ち 違うだろ、はははっ。＜笑い＞
受け /沈黙 2秒/なんの話だっけ？。
待ち なんだっけ？、そうそう、/沈黙 2秒/なんだっけ？。
受け 運動だ。

例では受け手の「予想（誰々かもしれない）」、受け手の「感想（違うだろ）」という「携帯イベント発話」の連続から、2秒の沈黙のあと受け手は「何の話だっけ？」という、携帯割り込み前に二人が話していた話題に戻す発話をしている。このような発話を「割り込み前の話戻し」と定義し、その他の例として「何の話だっけ？」や「そう、それで？」などがある。

6. 2 各方略の頻度

以下は6. 1で分類した受け手、待ち手それぞれの方略の頻度である。

6. 2. 1 受け手の方略頻度

受け手	合計	1回目	2回目	3回目	4回目
ターン	113	49	32	19	13
中断	14	3	5	5	1
中断依頼	4	2	1	1	
通話要求	2		1	1	
出る発話	2		2		
謝罪	1	1			
報告	46	24	12	6	4
推測	12	2	7	2	1
拒否	8	2	4	1	1
電オフ	4	1	1	1	1
質問	11	2	4	4	1
疑問	28	11	8	6	3
反省	4	4			
不平	5		3		2
感想	9	3		4	2
派生	12	5	4	2	1
戻し	8	1	3	3	1

表 5 受け手の方略頻度（回数別） 左端の列は対話データから分類した受け手の方略。合計は携帯割り込みイベント内でそれぞれの方略が出現した合計数を表し、右側の列1回目、2回目は割り込みの回数を示す。

表5からは、受け手の方略の中で「報告」と「疑問」の2つの回数が、非常に多いことがわかる。そしてこの二つは割り込み回数が2回、3回と増えるにしたがって反比例するように方略回数が減っていることもわかる。

6. 2. 2 待ち手の方略頻度

待ち手	合計		1回目	2回目	3回目	4回目
ターン	81		33	26	13	9
中断依頼許諾	1		1			
通話要求許諾	1				1	
出る発話許諾						
謝罪許諾	1		1			
うながし	9		4	2	2	1
中断依頼拒絶						
通話要求拒絶	1			1		
出る発話拒絶						
謝罪拒絶						
禁止	1		1			
感想	15		4	6	2	3
納得	4		2	2		
いやみ	8		3	3	2	
気付き	2		1	1		
推測	13		4	2	4	3
質問	29		12	11	2	4
報告	1				1	
派生	6		1	1	3	1
戻し	9		4	2	2	1

表 6 待ち手の方略頻度（回数別） 左端の列は対話データから分類した待ち手の方略。合計は携帯割り込みイベント内でそれぞれの方略が出現した合計数を表し、右側の列1回目、2回目は割り込みの回数を示す。

表6からは、「許諾」と「拒絶」の数が少なく「質問」の数が非常に多いことがわかる。これは受け手の「報告」の数に比例している。また「感想」と「予想」が同等の回数であることもわかる。

7 章 考察

7 章では、本実験 2 の結果を元に考察を示す。

7. 1 各方略におけるポライトネス効果

以下は 6 章で分類した受け手、待ち手それぞれの方略がどのようなフェイスに働きかけ、ポライトネス効果を持っているか Brown&Levinson のポライトネス理論に当てはめて考察したものである。また、ポライトネス方略にあたって相手のフェイスを脅かす可能性のある行為（F T A）を次のように定義する。

F T A①「対話中に携帯電話が鳴ること」

対話中に携帯電話が鳴るということは、相手との共同行為である対話を中断させることになる。それは待ち手の行動（言動）の自由を束縛することになるため、フェイス侵害行為にあたる。

F T A②「携帯電話に出ること・応答」

携帯電話に出るということは、F A T①の電話が鳴ることで中断した対話がさらに延長されることになり、また中断が再開されることにもなる。これらは束縛の延長、束縛の再開になるため、フェイス侵害行為にあたる。

F T A①と②は時系列で前後の関係にあり、F T 度（フェイス侵害行為の度合い）は①よりも②の方が高く（強く）なる。

7. 1. 1 受け手の方略におけるポライトネス効果

まず始めに携帯電話による対話の中断は、待ち手の「他者に好かれない、共感さ

りたい」というポジティブ・フェイスよりも、「他者から邪魔されたくない、自分の行動は自分で決めたい」というネガティブ・フェイスを侵害したことになるため、受け手の方略は主に、待ち手のネガティブ・フェイスに対して働きかけたものになる。

次に上記のことから、受け手の方略は待ち手のネガティブ・フェイスに対して配慮したものか、配慮したものではないかの大きく2つに分けることができる。また、このようなネガティブ・フェイスに配慮したポライトネス方略のまとまりとして、A：②中断依頼＋③通話要求＋④出る発話、B：⑤謝罪、C：⑥報告＋⑦予想、D：⑧拒否＋⑨電源オフ発話、の4つに分類することができ、それ以外はフェイス非配慮方略とした。以下はその説明である。

7. 1. 1. 1 フェイス配慮の方略

A：②中断依頼＋③通話要求＋④出る発話

④の「出る発話」は電話に出ることを前提にしているため、③の「出てもいい？」という「通話要求」とは多少異なるが、この3つの方略はともに受け手が待ち手に対して一度、選択の自由を与えている（待ち手は拒絶できる）という点で共通しており、待ち手のネガティブ・フェイスを配慮したポライトネス方略といえる。

B：⑤謝罪

⑤の「謝罪」はF T A①の「携帯電話が鳴ったこと」、F T A②の「携帯電話に出たこと」のどちらか、もしくは両方に対して受け手が待ち手に謝る発話なので、一番端的に待ち手のネガティブ・フェイスを配慮したポライトネス方略といえる。このため他の方略と同列に扱うことはできない。

C：⑥報告＋⑦推測

⑥の「報告」と⑦の「推測」は共に受け手のF T A①、②に対する理由の説明という点で共通している。受け手に対話の中断理由を説明し推測することで、それが待ち手にとって理解できる内容であれば、この二つの方略はネガティブ・フェイスを配慮したポライトネス方略といえる。

D：⑧拒否＋⑨電源オフ発話

⑧の「拒否」はF T A①（携帯電話が鳴ること）のあと、これ以上のF T Aは行わない（具体的にF T A②（電話に出ること）はしない）という意味になることから、待ち手のネガティブ・フェイスを配慮したポライトネス方略といえる。⑨の「電源オフ発話」は、2回3回と携帯電話が掛かってこないようにするという宣言（行動）であり、これは待ち手に安心させる（もしくは受け手がこれ以上F T A①も②も行わない）という意味になるため、ポライトネス方略といえる。この二つの方略は時系列で前後関係にあるという点で共通しており、同じ分類として捉えることができる。

7. 1. 1. 2 フェイス非配慮の方略

以下五つの方略は、待ち手のフェイスに配慮していないという意味でひとまとまりであるが、A：受け手が自分自身のフェイスに配慮したものと、B：誰のフェイスにも配慮してないもの、もしくはそれ以外の人のフェイスに配慮したものの、2つに分類することができる。

A：受け手が自分自身のフェイスに配慮している方略

①の「中断発話」は携帯電話呼び出しのあと受け手が、内容上それまでの対話の文脈にそぐわない発話のため、待ち手のネガティブ・フェイスに配慮したポライトネス方略とはいえない。そして「中断発話」は「行動を自由に選択したい」という受け手自身のネガティブ・フェイスを意識した発話であると理解できる。

⑩の「質問」は受け手が待ち手に対して返答を求める疑問形の発話だが、待ち手のネガティブ・フェイスに訴えかけるような配慮があるわけではないのでポライトネス方略とはいえない。しかし、受け手自身の「共感して欲しい」というポジティブ・フェイスを意識した発話であると理解できる。

⑬の「不平」は携帯電話呼び出しに関する受け手のネガティブな感想、不平・不満の発話であるため、受け手自身の「他者から邪魔されたくない」というネガティブ・フェイスに配慮した方略といえ。しかし、不平を発することが、待ち手に対し

て携帯電話の受信や電話に出ることが受け手自信も嫌々であることを意味し、それが待ち手のネガティブ・フェイスにも訴えていると考えることもできるが、明確な配慮として特定できなかったため、今回は非配慮の方略とした。

B：誰のフェイスにも配慮してない、それ以外の人のフェイスに配慮した方略

⑪の「疑問」は受け手が待ち手に対して返答を求めない疑問形の発話のため、待ち手を意識しているよりも、受け手が自分自身に「なぜか」と問い掛けている意味合いが強いため、誰かのフェイスを配慮したポライトネス方略とはいえない。

⑫の「反省」は待ち手に対する謝罪の意味ではなく、受け手が実験者に対して発した発話のため、ポライトネス方略とはいえない。このことから「反省」は実験者のフェイスに配慮した発話であるといえる。

⑭の「感想」は受け手が携帯電話呼び出しについてのネガティブではない意見のため、待ち手のネガティブ・フェイスに対して配慮したものではなく、ポライトネス方略とはいえない。また受けて自身や、それ以外の人へのフェイスに配慮した方略ともいえない。

7. 1. 2 待ち手の方略におけるポライトネス効果

待ち手の方略もまた、受け手の「自由に行動を選択したい、自分の行動は自分で決めたい」というネガティブ・フェイスに対して配慮したものか、配慮したものではないかの2つに分けることができる。また、待ち手は受け手の依頼や要求などに対し、①～⑤の許諾グループと⑥～⑩の拒絶グループに分類した。受け手のネガティブ・フェイスに配慮したポライトネス方略として、A：①中断依頼許諾～⑤うながしの許諾グループ、B：⑪感想＋納得、C：⑮推測＋⑯質問、の3つに分類できる。それ以外はフェイス非配慮方略とした。以下はその説明である。

7. 1. 2. 1 フェイス配慮の方略

A：①中断依頼許諾～⑤うながしの許諾グループ

受け手のポライトネス方略である、「中断依頼」「通話要求」「出る発話」「謝罪」

の

それぞれに対する許諾と、受け手が「通話要求」する前、もしくはなかなか電話に出ない場合に「出てもいいよ」とうながす発話は、待ち手自身のフェイスよりも受け手のフェイスを優先させる意味を持つ。これは、受け手の「自分の行動は自分で決めたい」というネガティブ・フェイスを容認し、許すというポライトネス方略といえる。

B：⑪感想＋⑫納得

携帯電話呼び出しに関するネガティブでない意見としての⑪「感想」と、受け手の「予想」や「報告」に理解を示す、待ち手の⑫「納得」は相手の意見を承認する意味があることから「他者に理解されたい、他者に共感されたい」という受け手のポジティブ・フェイスに働きかける効果もあり、受け手が待ち手に示した配慮に対する返答として解釈することができるため、（受け手の配慮に対する待ち手の配慮返し）この二つもポライトネス方略といえる。

C：⑮推測＋⑯質問

待ち手の⑮「推測」と⑯「質問」は、「なぜかかってきたか、誰からの電話か」という受け手の「疑問」や「質問」を共に考えていることになり、これは待ち手が受け手の方略を受け入れていることにもなる。このためBと同様に受け手のポジティブ・フェイスに配慮したポライトネス方略といえる。ただしBと異なる点として、Bが受け手の促しによる受身的な方略であるのに対し、Cは待ち手自身からの積極的、自発的な方略であるといえる。

⑰の「報告」は、受け手が待ち手に通話中の携帯電話を手渡し、待ち手がモデム音を聞いている間に通話が切れたため、受け手に「切れた」という状況を報告した例外である。この場合、待ち手は「通話が切れたという状況」を受け手が欲しているだろうと考え、配慮したからこそ「報告」したのである。このことから、例外ではあるが待ち手の報告をポライトネス方略といえることができる。

7. 1. 2. 2 フェイス非配慮の方略

以下三つの方略は、受け手のフェイスに配慮していないという意味でひとまとまりであるが、A：待ち手が自分自身のフェイスに配慮したものと、B：誰のフェイスにも配慮してないものの、2つに分類することができる。

A：待ち手が自分自身のフェイスに配慮した方略

⑥中断依頼拒絶～⑩禁止発話の拒絶グループ

受け手のポライトネス方略である、「中断依頼」「通話要求」「出る発話」「謝罪」の

それぞれに対して拒絶と、「電話切れ」という受け手が通話することを禁止する発話は、第三者からの割り込みを拒否するという意味で、受け手への配慮ではなく待ち手が「他者から邪魔されたくない」という自分自身のネガティブ・フェイスを守るための方略であると考えられる。

⑬の「いやみ」は携帯電話の呼び出し、通話に関するネガティブな感想、不平・不満のため拒絶グループと似ているが、それらと違う点は「いやみ」の場合、待ち手は受け手の何らかの行動を一度許したあと（自分の顔がつぶれたあと）、文句をいうのである（許すつもりはなかったが、先に受け手が電話に出てしまう可能性も考えられる）。そのような意味で拒絶グループとは異なるが、発言内容から推測すると、受け手への配慮ではなく「いやみ」を言うことが自分を慰めることになり、待ち手が「他者から邪魔されたくない」という自分自身のネガティブ・フェイスを守るための方略であると考えられる。

B：誰のフェイスにも配慮してないもの

⑭の「気付き」は携帯電話の着信音が鳴っていることに気付いた、というだけの発話であるため、「うながし」とは異なり、内容的に受け手にも待ち手自身にも配慮したものとはいえないため、ポライトネス方略ではない。

7. 1. 3 携帯電話イベント外の方略におけるポライトネス効果

ここでは携帯電話の話題に言及していない、携帯イベント外の方略におけるポライトネス効果を受け手、待ち手それぞれについて考察する。

7. 1. 3. 1 携帯派生話題の導入

受け手が「携帯派生話題の導入」をした場合、割り込み前の話題の中断を延長することになり、「他者から邪魔されたくない」という待ち手のネガティブ・フェイスを配慮していないことになるため、ポライトネス方略とはいえない。

待ち手が「携帯派生話題の導入」をした場合、割り込み前の話題よりも携帯電話に関連した話題を待ち手が選んだことになる。これは待ち手にとって、割り込みが強いFT度ではなかったことを意味し、受け手の「自分の行動は自分で決めたい」というネガティブ・フェイスを救うことになり、待ち手はそのフェイスを配慮したまま、しばらくその話題に付き合うことになるため、ポライトネス方略といえる。

7. 1. 3. 2 割り込み前の話戻し

受け手による「割り込み前の話戻し」の場合、受け手のこれ以上割り込みによって起こった「携帯イベント発話」という中断を終わらせ、割り込み前の話題を再開させたという行為の表れとして考えられることから、これは待ち手の「他者から邪魔されたくない」というネガティブ・フェイスを配慮していることになり、ポライトネス方略といえる。

待ち手による「割り込み前の話戻し」の場合、受け手の「自分の行動は自分で決めたい」というネガティブ・フェイスよりも、待ち手が「他者から邪魔されたくない」という自分のネガティブ・フェイスを優先させたことになるため、受け手を配慮したポライトネス方略とはいえない。また、受け手が対話の中断を起こしたこともその理由として考えられる。以上のことから、これは待ち手自身のネガティブ・フェイスを守るためにとった方略といえる。

7. 2 フェイス配慮・非配慮の分類

7. 1で示した受け手、待ち手によるそれぞれの方略におけるポライトネス効果の考察から、6. 2で示した方略による頻度を下記のようにフェイス配慮、非配慮の視点で再分類した。

7. 2. 1 携帯電話イベントの方略におけるフェイス分類

受け手 ターン	合計 113		待ち手 ターン	合計 81
中断依頼 通話要求 出る発話	8		中断依頼許諾 通話要求許諾 出る発話許諾 謝罪許諾 うながし	12
謝罪	1			
拒否 電オフ	12		感想 納得	19
報告 推測	58		推測 質問	42
中断	14		報告	1
不平	5			
感想	9		中断依頼拒絶 通話要求拒絶 出る発話拒絶 謝罪拒絶 禁止	2
質問	11			
疑問	28			
反省	4			
派生	12		いやみ	8
戻し	8		気付き	2
			派生	6
			戻し	9

表 7 携帯電話イベントの方略におけるフェイス分類 左側の表が受け手、右側の表が待ち手である。7. 1で分類したように、同じようなポライトネス効果を果たす方略は一まとまりにしてある。網がけで塗りつぶしてある部分は、フェイスへの配慮がない方略。

表7からわかるように、受け手のポライトネス方略として「謝罪」がわずかに1回なのに対し、「報告+予想」は58回と極めて多い。また「中断依頼+通話要求+出る発話」が8回、「拒否+電源オフ発話」も12回と、フェイス非配慮のそれぞれの方略と比較しても少ないことがわかる。

これは、ほとんどの受け手が「中断依頼」や「通話要求」なく割り込み電話に出ることを示し、電話に出ている最中や電話が終わったあとで「報告、推測」など「謝罪」と比べて比較的ポライトネスの度合い（ポライト度）が軽い方略を多くとっているといえる。

方略のポライト度を厳密に順序付けることはできないが、待ち手へのフェイス侵害を認め相手の許しを乞う「謝罪」や、これから先電話に出ないことを意味する「拒否、電源オフ発話」などのポライト度は高いといえる。待ち手の許可を得てから電話に出ることを意味する「中断依頼、通話要求」が次に高く、電話途中や出た後でする「報告、推測」は今回のポライトネス方略の中では一番低い。

フェイス非配慮の方略の中で「疑問」が28回と他のものより多いが、これは①実験で流した刺激が普段聞きなれないモデム音であること、②25分間で3回という頻繁に掛かってくる割り込み電話など、実験設定が原因で高い頻度を示したと解釈することができる。

待ち手のポライトネス方略では「許諾」が12回、「感想＋納得」が19回に対して「推測＋質問」が42回と非常に多い。これらのフェイス配慮の方略よりも、フェイス非配慮である「拒絶」や「いやみ」などは少なく、受け手のネガティブ・フェイスに配慮した傾向であることがわかる。

受け手の「依頼や要求」、「質問」が少ないため待ち手の「許諾」、「感想」も少ないといえる。また、「拒絶」が少ないという結果から、待ち手は自分のフェイスよりも受け手のフェイスを優先させていることがわかる。「質問、推測」が非常に多いということは、受け手の「疑問」や「質問」を共に考えていることになり、待ち手は受け手の「F T Aをした理由」探しを手伝っていることにもつながる。受け手が示す曖昧な理由では満足できないため、待ち手が自発的に質問することで、待ち手は自分のネガティブ・フェイスを救っていると考えることもできる。

7. 2. 2 携帯電話イベント外の方略も含んだフェイス分類

受け手		合計	待ち手		合計
ターン		113	ターン		81
フェイス配慮	中断依頼	87	フェイス配慮	中断依頼許諾	80
	通話要求			通話要求許諾	
	出る発話			出る発話許諾	
	謝罪			謝罪許諾	
	拒否			うながし	
	電オフ			推測	
	報告			質問	
	推測			感想	
	派生			納得	
フェイス非配慮	中断	83	フェイス非配慮	中断依頼拒絶	21
	不平			通話要求拒絶	
	感想			出る発話拒絶	
	質問			謝罪拒絶	
	疑問			禁止	
	反省			いやみ	
	戻し			気づき	
				派生	

表 8 携帯電話イベント外の方略も含んだフェイス分類 左側の表が受け手、右側の表が待ち手である。7. 1で分類したように、フェイス配慮と非配慮の分類としてまとめている。網がけで塗りつぶしてある部分は、フェイスへ非配慮の方略群。

表8をみると、受け手が待ち手のネガティブ・フェイスに対して配慮した場合と非配慮の場合ではほとんど差がない。一方、待ち手は受け手のフェイスに配慮した方略と配慮していない方略の差にはっきりとした傾向が見られる。これは、受け手は待ち手へのフェイス配慮と同じ程度自分のフェイスも配慮していることになり、逆に待ち手は自分のフェイスよりも、受け手のフェイスを優先して配慮しているといえる。

受け手が想定するF T度（携帯電話の割り込み）の見積もりが低いことは先ほどの考察で記したが、待ち手のF Tどの見積もりもまた、受け手のフェイスの方を重視しているため低い、とはいいい難い。なぜなら本来、待ち手がF T度を高く見積もった場合は、自分のネガティブ・フェイスをより強く配慮することが考えられるが、待ち手は自分が受け手になった場合のことを考えている可能性があるからである。よって、この結果から待ち手が想定するF T度の見積もりの高さを測ることはできない。

7. 2. 3 各割り込みにおけるポライト・ノンポライト発話の比較

1組目	1回目	polite発話	受け手	6	14
			待ち手	8	
		non-polite発話	受け手	4	4
			待ち手		
	2回目	polite発話	受け手	7	13
			待ち手	5	
		non-polite発話	受け手	5	5
			待ち手		
	3回目	polite発話	受け手	2	2
			待ち手		
		non-polite発話	受け手	1	1
			待ち手		
4回目	polite発話	受け手	5	8	
		待ち手	3		
	non-polite発話	受け手	4	4	
		待ち手			

2組目	1回目	polite発話	受け手	9	17
			待ち手	8	
		non-polite発話	受け手	5	6
			待ち手	1	
	2回目	polite発話	受け手	6	15
			待ち手	9	
		non-polite発話	受け手	4	4
			待ち手		
	3回目	polite発話	受け手	1	4
			待ち手	3	
		non-polite発話	受け手	2	2
			待ち手		
	4回目	polite発話	受け手	3	12
			待ち手	9	
		non-polite発話	受け手	6	7
			待ち手	1	

3 組目	1 回目	polite発話	受け手	2	3
			待ち手	1	
		non-polite発話	受け手	2	4
			待ち手	2	
	2 回目	polite発話	受け手	6	11
			待ち手	5	
		non-polite発話	受け手	3	4
			待ち手	1	
	3 回目	polite発話	受け手	1	4
			待ち手	3	
		non-polite発話	受け手	2	3
			待ち手	1	

4 組目	1 回目	polite発話	受け手	3	4
			待ち手	1	
		non-polite発話	受け手	1	2
			待ち手	1	
	2 回目	polite発話	受け手	2	4
			待ち手	2	
		non-polite発話	受け手	4	5
			待ち手	1	
	3 回目	polite発話	受け手	2	3
			待ち手	1	
		non-polite発話	受け手	3	3
			待ち手		

8 組 目	1 回 目	polite発話	受け手	1	5
			待ち手	4	
		non-polite発話	受け手	5	5
			待ち手		

10組目	1回目	polite発話	受け手	1	3
			待ち手	2	
		non-polite発話	受け手	1	2
			待ち手	1	

7 組 目	1 回 目	polite発話	受け手	6	9
			待ち手	3	
		non-polite発話	受け手	3	3
			待ち手		
	2 回 目	polite発話	受け手	4	5
			待ち手	1	
		non-polite発話	受け手	3	4
			待ち手	1	
	3 回 目	polite発話	受け手	4	8
			待ち手	4	
		non-polite発話	受け手	4	5
			待ち手	1	

11組目	1回目	polite発話	受け手	1	1
			待ち手		
		non-polite発話	受け手	4	8
			待ち手	4	
	2回目	polite発話	受け手	2	3
			待ち手	1	
		non-polite発話	受け手	3	7
			待ち手	4	
	3回目	polite発話	受け手	4	6
			待ち手	2	
		non-polite発話	受け手	5	7
			待ち手	2	

12組目	1回目	polite発話	受け手	4	6
			待ち手	2	
		non-polite発話	受け手	3	3
			待ち手		
	2回目	polite発話	受け手	4	5
			待ち手	1	
		non-polite発話	受け手	2	2
			待ち手		
	3回目	polite発話	受け手	1	3
			待ち手	2	
		non-polite発話	受け手	4	4
			待ち手		

表 9 各割り込みにおけるポライト・ノンポライト発話の比較

組数は被験者

のペア、1回目2回目は割り込み回数である。表6から polite 発話はフェイス配慮、網がけで塗りつぶしてある部分は、フェイス非配慮の non-polite 発話。数字は頻度。

表9はフェイス配慮をポライト発話、フェイス非配慮をノンポライト発話として、受け手、待ち手全ての「携帯イベント発話」によるそれぞれの方略を割り込み回数毎に見た表である。受け手、待ち手それぞれ全25回の割り込み毎にポライト・ノンポライトの発話頻度を、ウィルコクソン検定で比較した。

その結果、全50回の割り込みにおいて有意傾向が見られ、受け手、待ち手それぞれについて、携帯イベントに対する発話は、ポライトネス発話の方がノンポライト発話よりも頻度が高いことがわかった ($n=50$, $Z=-2.712$, $p<0.05$)。さらにこのことから、受け手が携帯電話に出た場合の方が出ない場合よりも、ポライト発話の方が多いという仮説を立てた。その結果、携帯電話に出た26回の割り込みにおいても有意差が見られ ($n=26$, $Z=-2.178$, $p<0.05$)、電話に出なかった24回の割り込みでは有意差が見られなかった ($n=24$, $Z=-1.713$, $0.05<p$)。このことから、携帯電話に出た割り込みの方がポライトネス発話は多いということが確認されたため、仮説は立証された。以上の結果から、割り込み回数の増加によって受け手、待ち手共にフェイスを配慮したポライトネス方略が減ることはないことがわかる。これは、割り込み回数がFT度を高く（強く）することはあっても、割り込みに対する慣れという意味でFT度が低く（弱く）なることはないといえる。

7. 3 観察結果から

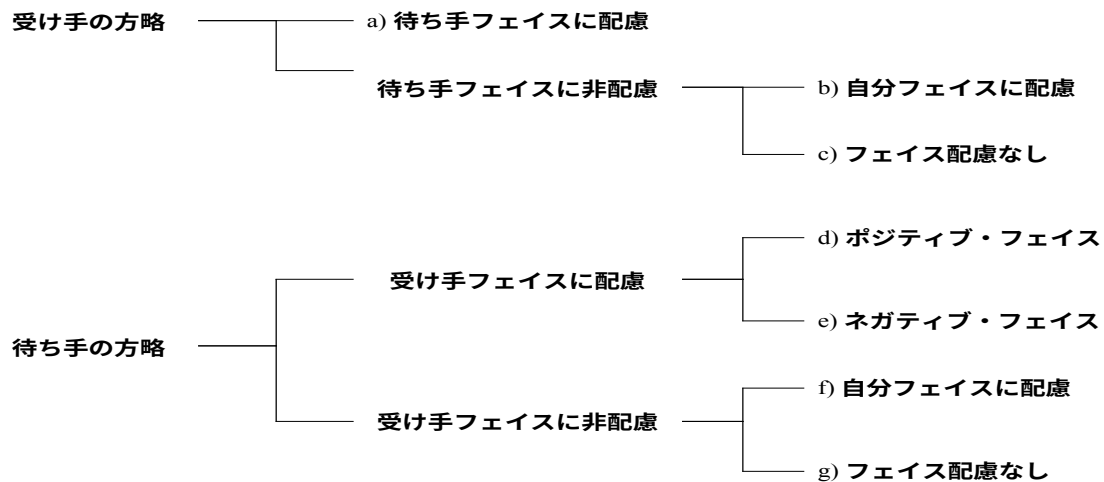


図 6 受け手、待ち手それぞれの方略関係図

図6は受け手、待ち手それぞれの方略をまとめたものである。受け手の方略は主に、

- a) の待ち手フェイスに配慮したもの（②中断依頼、③通話要求、④出る発話、⑤謝罪、⑥報告、⑦推測、⑧拒否、⑨電源オフ発話）があり、
- 待ち手フェイスに非配慮のものは、
- b) の自分フェイスに配慮したもの（①中断発話、⑩質問、⑬不平）と
- c) の誰のフェイスにも配慮していないもの（⑪疑問、⑫反省、⑭感想）がある。

待ち手の方略もまた、細かく4つに分類した。待ち手フェイスに配慮したものは、

- d) の受け手のポジティブ・フェイスに配慮したもの（⑪感想、⑫納得、⑮推測、⑯質問）と、

- e) の受け手のネガティブ・フェイスに配慮したもの（①中断依頼許諾、②通話要求許諾、③出る発話許諾、④謝罪許諾、⑤うながし、⑰報告）があり、
- 待ち手フェイスに非配慮のものは、さらに
- f) の自分フェイスに配慮したもの（⑥中断依頼拒絶、⑦通話要求拒絶、⑧出る発話拒絶、⑨謝罪拒絶、⑩禁止発話、⑬いやみ）と

g) の誰のフェイスにも配慮していないもの (⑭気付き) がある。

「携帯イベント発話」から受け手、待ち手それぞれの方略についてポライトネス効果を考察し、その頻度をフェイス配慮、非配慮の視点で分類した結果、対話中の携帯電話割り込みによるポライトネス方略を大別することができた。ここでは改めて、受け手と待ち手別々に観察できたことを記す。

半数の受け手が、実験中という制約があるにもかかわらず電話に出ることから、対話中における携帯電話の割り込みは、受け手にとって強い F T A ではないことがわかる (何の前ぶれもなく電話に出るケースもあった)。それは、電話が終わったあとで「報告、推測」を多くとっている結果からもういえる。

待ち手は自分のフェイスが脅かされることに憤慨するよりも、受け手の受信・通話をうながし、かかってきた携帯電話の内容にコミットすることで受けてのフェイスを配慮している。これは「質問、推測」の方略数が非常に多いという結果からもういえる。しかし、このことは同時に受け手が示す曖昧な F T A の理由として満足できないため、待ち手が自発的に質問することで、自分のネガティブ・フェイスを救っているとも考えることもできる。

また、受け手にとって対話中における携帯電話の割り込みは、強い F T A ではなかった理由として、実験中の対話内容が日常的で雑談のようなものだったため、それほど重要内容ではなかったこと、親しい友人同士での対話だったため携帯電話の割り込みが強い F T 度にはならなかったことが理由として考えられる。

待ち手が自分のフェイスより受け手のフェイスを優先させたということは、待ち手自身も自分が受け手になる場合、どのように受け答えされるのがより良い方法なのか、体験からわかっていたということが理由として考えられる。

ポライトネス方略を大別できたことで、受け手、待ち手それぞれのポライトネス方略はお互いに、行動の自由の束縛という相手のネガティブ・フェイスを一番重視している (配慮している) ことがわかった。

8 章 終わりに

近年若者の携帯マナーが悪くなったと言われているが、実際に携帯電話のマナーは確立していない。日常社会におけるマナーは法律と違い、人々の間で時間を掛け徐々に作られていくものである。だとするならば、携帯電話の普及率が高まった今こそ、割り込みという対話相手のフェイスを脅かす可能性のある行為を見つめ、相手の負担を軽減するための方略（マナー）を導くことに本研究の価値がある。携帯電話は、病院や劇場などの場所や上司や友人、家族など一緒にいる人との異なる関係で、電話に出る・出ない、長く話す・すぐに切るなど受け手の反応は大きく変化する。本来ならば様々な条件設定において、対話割り込みを比較することができれば良かったのだが、携帯電話による割り込みの特徴をつかめていない状態で他と比べることはできない。本研究ではまず対話相手を親しい友人と設定し、その状況と言語的な方略だけを観察した。結果でも書いている通り、携帯電話の受け手は直接的な「謝罪」という方略はあまり取らなかったが、待ち手に対し何かしらの配慮ある行動をしていることがわかった。

本研究では、対話中の割り込み状況を明らかにするだけでなく、ポライトネス理論の「フェイス」という概念を適用して、携帯電話の受け手と待ち手がお互いの相手に対して言語的にどのような配慮をしているかを考察した。これは、今まで語用論研究として文章の引用や、対面での話のやり取りの中から一文を抜き出し研究対象としてきたポライトネス理論とは、大きく異なる。ポライトネス理論はその定義の中で「円滑な人間関係の確立・維持するための言語的ストラテジー」とあるが、必ずしも対面对話での言語形式だけにとらわれたものではない。「円滑な人間関係」を根底のテーマとして扱っている以上、どのような場面でも応用可能である。携帯電話を題材として、日常よく起こりうる割り込みといった認知、言語的なテーマだけでも新鮮であるが、それをさらにポライトネス理論を適用したことで理論の新しい応用範囲を示した点にも、本研究の意義があるといえる。

本研究の三つ目の貢献として考えられることは、携帯電話の技術的な設計の指針になることである。今日まで科学技術は、「便利なもの」「人や環境にやさしいもの」をコンセプトとして様々な技術開発をしてきた。携帯電話も例外ではなく「いつでも」「誰とでも」「早く簡単に」連絡が取れる道具として作られ、今では多くの人に使われている。しかし、その便利さゆえに「個人の自由を奪い、相手の自由をも奪う」という弊害を生み出している。人は慣れることでそのような弊害に対する免疫力をつける。しかし携帯電話の危険なところは、それが人と人を結ぶコミュニケーション・ツールということにある。人との関係を学ぶ成長段階（中学、高校）において携帯電話を頻繁に使い、相手の痛みに気付かず、平気で人のフェイスを脅かすことだけをしていれば、隣の家の人でさえ疑いながら生活するような社会になる。そのようなことを防ぐ意味でも、本研究は今後の携帯電話の技術設計として、「人のフェイスの何を救えばいいのか」「なにをやめればいいのか」という指針につながる。今回、ポライトネス方略を大別したことから、受け手待ち手それぞれのポライトネス方略は、「行動の自由の束縛」というお互いのネガティブ・フェイスを一番重視している（配慮している）という結果がある。それならば、例えば受信時に携帯電話を取り出して発信者を見なくても、腕時計に表示されるような機能をつけるなど、ネガティブ・フェイスを配慮するような技術設計が考えられる。

最後に今後の課題として、本実験は親しい友人と閉ざされた空間で雑談するという設定で携帯電話呼び出し前後の対話と、その中の特に携帯電話イベント（中断）に言及した対話の分析を行った。発話ターンごとに受け手と待ち手が発する、ひとつずつの発話を分類し、それぞれの方略によるポライトネス効果を考察したが、細かい部分の分析と第三者による評価ができず、どのような方略を取ればコミュニケーションがスムーズに進行するのか、要因の究明まで踏み込むことはできなかった。また、携帯電話の刺激も普段聞きなれないモデム音だったため、方略も「疑問」や「質問」の頻度が高かったことが考えられる。

その他ポライトネス効果を果たす役割は言語的なものだけではなく、かかってきた携帯電話を相手に見せる、聞かせるなど（始めから携帯の電源をオフにすることも含めて）、身体的な行動が色々とあるはずである。これらの観察もできずに終わっ

た。さらに今回は、携帯電話イベントに言及した発話部分だけを「ディスコース・ポライトネス」の有標の言語行動として分析したが、限られたことしか見られなかったため、対話全体を通しての話題導入頻度や、受け手待ち手の総ターン数などの必要性を認識した。それも合わせて今後の課題としたい。

参考文献

東 照二 1994 「丁寧な英語・失礼な英語」(英語のポライトネス・ストラテジー)
研究者出版

1997 「社会言語学入門」 研究者出版

生田少子 1996 「ポライトネスの理論」 月刊「言語」

井上逸兵 1999 「伝わるしくみと異文化間コミュニケーション」 南海堂

今井邦彦 2001 「語用論への招待」 大修館書店

宇佐美まゆみ 1993 初対面の二者間の会話の構造と話者による会話のストラテジー：
話者間の力関係による相違—日本の場合

1996 初対面二者間における話題導入頻度と
対話相手の年齢・社会的地位・性の関係について

1998 初対面二者間における「ディスコース・ポライトネス」

1998 ポライトネス理論の展開：
ディスコース・ポライトネスという捉え方

1999 「ね」のコミュニケーション機能とディスコース・ポライトネス
女性のことば・職場編 日本語研究会編 ひつじ書房

- 2001 談話のポライトネスーポライトネスの談話理論構想ー
- 言語編集部 2001 月刊「言語」11月号 大修館書店
- 松田美佐 2000 若者の友人関係と携帯電話利用
ー関係希薄化論から選択的關係論へー
- 2001 現代のエスプリ「携帯電話と社会生活」4月号 至文堂
- ジェニー・トマス 監修：浅羽亮一 1998 「語用論入門」 研究者出版
- ジェフリー・N. リーチ 訳：池上嘉彦 河上誓作
1987 「語用論」 紀伊国屋書店
- ジョージ・ユール 訳：高司正夫
2000 「ことばと発話状況」 リーベル出版
- 田中春美 田中幸子 1996 「社会言語学への招待」 ミネルヴァ書房
- 津田早苗 1999 「談話分析と文化比較」 リーベル出版
- 橋本良明 2000 「コミュニケーション論から見たエチケット」 月刊「言語」
- 藤原智美 2000 「『家をつくる』ということ」 プレジデント社
- 2001 「家族を『する』家」 プレジデント社
- マルコム・クールダード 1999 「談話分析を学ぶ人のために」 世界思想社
- 森山卓郎 1989 『日本語のモダリティ』 「コミュニケーションにおける聞き手

情報：聞き手情報配慮・非配慮の理論」 くろしお出版

好井裕明 他 1999 「会話分析への招待」 世界思想社

編者不明 2000 月刊「日本語学」10月号 明治書院
特集－ケータイ・コミュニケーション－

Brown. P and Levinson. S (1987) Politeness Some universals in language usage.
Cambridge University Press.

<web>

宇佐美まゆみ 1997 日本語の自然会話の分析
(文字化方法の統一とデータの共有について)
[http://japanese.human.metro-u.ac.jp/kokubun/
mic-J/nihongo/mic-j-kaiwa.html](http://japanese.human.metro-u.ac.jp/kokubun/mic-J/nihongo/mic-j-kaiwa.html)

関山健治 1997 日本語の「慰め」表現に見られるポライトネス・ストラテジー
<http://members.tripod.com/~sekky/97hakuba.html>

1999 英語の「慰め」表現に見られる母語からの語用論的転移
<http://members.tripod.com/~sekky/ylcpap.html>

橋本佳美 2000 終助詞「もの」のポジティブ・ポライトネス
<http://homepage1.nifty.com/jiamei/nihongo/mono-shagengo.htm>

森山 新 1998 終助詞「な」の意味・用法について
<http://dasan.sejong.ac.kr/~morishin/na2.html>

1999 終助詞「な」と「ね」の意味・用法の違いについて

<http://dasan.sejong.ac.kr/~morishin/nena2.html>